
傷つけたくなくて

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷つけたくなくて

【Nコード】

N9811T

【作者名】

mine

【あらすじ】

「もう、誰も…傷つけたく、ないんよ。」

―苦痛が体中を駆け巡る。

受け入れられない運命に襲われ、周りを傷付ける事を何処までも嫌う少女。

―何度も助けられてしまったから。

「……アタシ、新一君が……好き。」

― 噛み合い始めた暗黒への歯車は…… 回転を加速させた。

「工藤新一……私は奴を消すために生きているの。」

― 壊れて

「アイツの代わりに……なれっかな？俺は……」

― 想って

「もう……会えないっ……！」

― 望む未来は、儚く消える。

けれど、それでも全てを終わらせはしない。

「―それが俺が愛した遠山和葉なんやからな。」

0章 もう戻れない世界（1）

「ただいま〜！」

「お帰り、和葉。夕飯の支度、出来てるで。」

「うん、分かった。着替えて来る。」

―いつになく、和葉は上機嫌そうに自分の部屋へ向かった。

（久しぶりやわ…蘭ちゃんに会うのも♪それに今回は流石に、事件はないやろし…）

大体、東京行く時といえば、平次か和葉が引つ張って来た事件か、または「事件吸引体質」の及ぼす効果なのか、東京で発生した事件…どちらかのせいで、ゆっくりする間もなく終わってしまう。

だが、今回は蘭と二人つきりなのだ。

―事の起こりは、一週間前…

『何い！？温泉のペアチケットが当たった！？しかも…草津やと！？』

『ああ…静華の奴、商店街のくじ引きで当ててきおった。』

『で…親父達で行くんやろ？草津…』

『……』

（…そんな暇、あるわけないか）『んな事言ったって…俺はその日、剣道の公式戦やぞ！？』

『やったら…遠山の所の娘にでも渡して来い。』

―という成り行きで、和葉にチケットが回ってきて、最終的に和葉は蘭と一緒に一泊二日の温泉旅行を計画する事に大成功したのである。

（ん…確かに、最近疲れてたし…丁度ええかな♪）

…といった感じの事ばかりを、ここ一週間ずっと考え続けていたのであった。

『和葉…早くせんと冷めてまうで…！』

「あつ、今行く…！」

急いで階段を駆け下りて、和葉はリビングへと出た―その時。

来るなあ！！和葉あ！！

（お、お父さん！？）

いきなりの叫び声―それも、かなり慌てたような…

「ど、どないして…っ！！」

リビングのドアを開いた先に、さっきは居なかった銀司郎が横に倒れていた。

そして、さっきまで居たはずの母親が…居ない。

「お、お母さんは…」

「アホッ…和葉、何で来て…（パン、パン）ぐあっ…」

その時、慌てていた和葉は―ようやく、すぐそこから発せられていた銃声に気付いた。

「…どういっつもりなん？」
「…どういっつもり、だと？」

目の前の長身の男を、鋭く和葉は睨みつけた。

（無理や…絶対、うちの力じゃ勝てへん…勝てへんけど…）

「…他人の家いきなり入ってきて、何するつもりやったんか、って聞いてるんやけど。」

「…お前には関係ない話だ。それより、さっさと退け…殺すぞ。」

だが、長身の男も―鋭く和葉を睨みつける。

「…っ…」

「どうした…退かなければ、殺るまでだが…」

―その威圧感に、和葉は横へ退いた。

「…分かった。」

「ああ…」

そして、男が銀司郎に近付く―その時！

「らぁあっ！」

「なっ…」

―上手く足を掛けて、男を転ばせる！

「ぐっ…」

そして、男に体重を掛けて、固めた。

「お父さん！…これで警察呼んで！」

和葉が、携帯を銀司郎に放り投げる。

「甘いなあ。嬢ちゃん。」

「っ！」

…しかし、その携帯はすんでの所で、大柄な男に取られ、叩き落された。

上半分と下半分が、綺麗に分断される。

そして、固めていたはずの長身の男は―気がつけば和葉から抜け出し、逆に和葉を捕らえていた。

「フン…言った筈だ。邪魔をすれば…死ぬとなっ！」

和葉を掴み、一度上へ上げてから畳へと叩きつけた。

「きゃっ…っあ！」

叩きつけられた衝撃が、和葉に苦痛を与える。

「遅いぞ…ウオツカ。女の方の搜索はしなくても構わないと言った筈だ。」

「す、すいやせん…」

「―まあ、いい。さてと…」

二人は、和葉の方を向き直った。

「…どうしやす？兄貴…今殺つても…」

「ーダメだ。この女をここで殺つたら、全ての計画が台無しになる…例の薬を出せ。」

（れ、いの…くす、り？）

薄れかける意識の中、何とか和葉はその単語を聞き取った。

「これ…ですね。」

「…さてと、出来底無いの名探偵の真価が分かる時だぜ…」

そして、その男は和葉にカプセルを飲み込ませ…水を流し込む。

『ピーポ、ピーポ…』

「…警察！？」

「いや、救急車だ…まさか、あの女が電話したのか…！仕方ない、ずらかるぞ。」

「へ、へい。兄貴。」

そして、最後に―男は一言残し、その場を去った。

「あばよ…名刑事の小娘。」

意識が朦朧とする中、何も聞き取れなかった和葉。
（も、もう…何が…）

―そして、気を失った。

0章 もう戻れない世界(1) (後書き)

1話目から何をやるか読めてしまう…って人、ごめんなさいm
|) m

0章 もう戻れない世界(2)

「さてと……説明してもらおうか。どういう事か……」

「ははっ、やだな……ジンさん……ははっ、」

――一人の男の額には、拳銃が突き付けられている。

「――『今朝の新聞に、家の中から、一人の幼児の焼死体が現れると書き立てられる』そう言ったのはお前だったな……？」

「な、何を……」

パン

「フン……」

――きつちりと、新聞には一人の『女性』の焼死体が発見されたと記述されていた。

（まさか、シェリーが小さくなって化けている……なんて考えちゃったが、そんな筈は……ねえな。）

タバコに火をつけた所で、ウォツカがやって来た。

「兄貴……」

「ああ、予定通りだ……心配するな。ちゃんと『引越した矢先の不

『幸な事故』に仕立て上げきったからな…」

ほくそ笑みを浮かべながら、雲に覆われた薄暗い空を二人は眺めていた。

~~~~~

ここは、何処？

…覚えてるんは、あの変な黒い服の男に…薬飲まされたゆう事。

やとしたら…地獄？

―ちやう。ここは…

「おお…目を覚ましたぞ！」

―病院…そつか、生きてたんや…

「坊や、何処も痛くないかい？」

坊や…？何言うてんやろ…この男。あたしやって、もう17やで…  
「う、うん…痛…っ！」

―声…ちやう。

「あれっ、あれっ…」

「大丈夫。直にお父さんも、お母さんも戻ってくるから…」

出ない、出ない！元の声…あたしの、元の……え…

え……？

「……どうしたんだい？ やっぱり、何処か痛むのかい？」

あっ……あははっ……

嘘や、嘘や……

「……大丈夫？」

こん、なの……

「嘘やあああああああ！！」

嘘や！絶対、絶対……

「お、おい……坊や！待ちなさい！くっ……」

ダメ、ダメ……嘘や、嘘や！！  
こんなの、夢……夢やって！！

なんであたしが小さくなってるの！？  
まるで…小学生みたいに！！

何で…何で！？

…あの、薬…？

『あばよ、名刑事の小娘』

…そういう、意味やったん！？

もう戻れない…そういう！

どろろどろろどろろどろろ…

—どうして、あたしは小さくなっちゃったんやろ…

「はあ、はあ…」

—何処…やろか。 じい…

あつ…

「哀、ちゃん…」

…ここ、米花町…やったんやね。

今日は土曜日…やから、買い物…なんかな？

え…？

ちょ、待ち。

どうして…あたし、東京に来てる…ん？

—あそこで倒れたんやったら、その病院に居るはず…ちゃうの？

「ねえ…」

可笑しい…可笑しい…

「ねえ、あなた。」

えっ…!

「あ、あっ…」

「―そこで突っ立って、何してるの？さっきからずっとこっちを見てたみたいけど…」

あ…あっちから渡って来たんやね…哀ちゃん。

「お名前は？」

えっ!

「名前、何て言うの？」

あっ、あっ…

あ、そや…近所に居た、あの女の子…

「…あたし、東尾マリア。お母さんとはぐれてもつて…」  
「ーっ！」

…え？

「どないしたん？」

「…悪いわね。余計な事、聞いたみたい。」

…え？

「さよなら。」

あっ、あっ  
…

「ちょ、待って！まっ  
…」

―はあ…行ってもうた…

…誰に相談すれば…ええんやろ…

「…ね、ねえ…君…」

…え。

「どうしたの？さっきからずっと…」

「ナン君やないの…」

「うっん、何でも無い。ごめんな、邪魔になってて…」

—ま、さか…

『あの推理オタク、いつまで経っても帰ってこないのよね…』

「ちょ、待って！」  
「え…」

—辻褄、合う…でも、でも…

「君、コナン君？」  
「!」

― やとしたら… やとしたら…

「… やっぱり、そうだったんだね。」

えっ  
…

「和葉姉ちゃん。そう… だよな？」

## 0章 もう戻れない世界(2) (後書き)

和葉の瞬間転移が、かなり謎な話になってしまいました。

そして、次回に引つ張るお決まりパターンです。これからもどうか  
よろしくお願いしますm (――) m

## 0章 もう戻れない世界(3)

どうすればいいのだろう。

…彼以外を巻き込みたくは無かった。これ以上被害者を…増やしたくなかった。

なのに、どうしてだろう？

—彼女が…どうして。

…どうして、幼児化してしまったのだろう。

…私のせいだ。

私があんな薬を…作ったから……彼女も、哀しむ羽目になった。

私がいなければ…こんな事にはならなかった筈なのに…

—私のせいだ…

~~~~~

「…ん、上がって。」

「うん…ありがとう。」

取り敢えず、コナンは幼児化した和葉を連れ、阿笠邸へと上がった。

「おお、コナン君…で、隣の子は？」

—余りにも予想通り過ぎる質問が届いたので、思わずコナンは苦笑した。

「ああ……ちよつと、訳ありでな。それより、灰原は何処だ？」

「帯を見回して、「地下室か？」とコナンは訊ねる。

「あ、いや……」

「――哀ちゃんなら、さつきすれ違ったんやけど……」

「えっ！本当かそれ！？」

「ああ、哀君じゃったらさつき買ひ物に……」

小さくコナンは溜息をついて、「仕方ねえな」と呟いて、ソファへと寝転んだ。

「わりい…博士。灰原戻ってきたら教えてくれ…それまで寝っから」

―クスツと、和葉は笑った。

―信じられない手紙が届いたのは今朝の事やった。
パソコンで打ち込まれた手紙…それが、和葉から届いたんは。

『お父さんの都合で転校する事になりました。今までありがとな。
和葉』

…今朝、新聞を見て、ハツとした。

『一人の女性の焼死体、見つかる』

そして、やはり…

『和葉ちゃん、大丈夫なの！？』

―和葉や無い。絶対…絶対和葉や…無い…
「無事という連絡は来たんやけど、今は居ない」とだけ伝えといた。

疑った。心配してた。

…探さんと。絶対に。
早く見つけんと…

ガチャ

「平次？いるか？」

— っ たく… 親父。

「ああ、おるで… っ て！ 見れば分かるやろ！」
「… 取り敢えず、これ見てみい。」

ん… なっ…

… なん、やと… ？

「わーったら……手出すんはやめとくんやないや、今回は父親として、強制や……直に戻ってくるやろ……あの馬鹿も……いやー」

「俺が取り戻す。」

ガチャ

……くそっ……！

~~~~~

ん……

ふああああ…

「ん…あれっ……えっ…！」

—もう5時！？

「おいおい博士！何で起こしてくれ…」

「—帰ってきてないからじゃよ…」

…え？

「哀君が、まだ帰ってきとらんのじゃよ…可笑しいのお…」

あいつが…？

おいおい…！

「まあ、哀君の事じゃし、ちゃんと戻ってく…」

「—なんて暢気に考えてる場合じゃねえっての！あいつが、そんなどっかをぶらぶらしてる奴なわけねえだろ！」

あいつが…かなりの危険に曝されてる危険性だつてある。

…ったく…あいつ、手間掛けさせやがって！

くそっ！

「博士！ちょっと行ってくる！」

「お、おい…何処へじゃ！？」

スケボ―…あつた！

「―あいつがいつも行ってるデパートまでの道のりを、一通り見てくる！」

…くそっ…それで、見つかるか…？

「待って！コナン君！」

「えっ…」

和葉、ちゃん…

「あたしも行く！」

「なっ…何言って―」

「さっき哀ちゃんとすれ違った時、なんか何時もと違う雰囲気したんよ…何処かでゆっくりしてるなんて考えられへんし！」

…くっそお…面倒だな！

「わーっ たよ！ 乗れ！ 悪いけど飛ばすからな！」  
「う、うん！ 分かった！」

— よしっ …

「博士は取り敢えず待機して、灰原が戻ってきたら連絡してくれ！」  
「あ、ああ…」

— 頼む… 無事で居てくれよ！

## 0章 もう戻れない世界(4)

…辛い。

彼女が、私のせいで…こんな目に遭ってしまった。  
…私のせいだ。

…どう、償えばいい？  
いいえ…どう、謝ればいい？

—ここから降りれば、楽になれる？  
—ここから降りれば、償える？  
—ここから降りれば、謝れる？

…私がここから降りれば、全ては解決する？

組織と…皆の接点が、無くなる。  
そうすれば…解決する？

…それ以外の方法が、ある？

―消えよう…私は。

皆、ありがとう…本当に。  
さような…

「―どないしたん？哀ちゃん…」

えっ…

「―何か堤向津川に落としたん？」

―東尾さん…

「えっ…ええ。ちょっと十円玉を…ね。」

「残念やったね…でも、あんまり気落としたらあかんよ。」

「そ、そうね…」

…何か、そんな雰囲気じゃ…無くなっちゃったわね。  
ふふっ…少し感謝したいくらい。

「…ありがとう。」

「ん？何か言った？」

「え、別に…なんでもないわ。」

…ありがとう。

「またな～哀ちゃん！」

「ええ、またね。」

「灰原！おい！」

あら…工藤君。

「おい…どうしたんだよ。もうこんな時間だぜ？」

「ええ…ちよつと公園で転がってたら、凄い時間になっちゃったのよ…ま、気にしないで？」

…こんな所でいいかしら。言い訳。

―彼を心配させないようにする為の、言い訳。

「まったく…取り敢えず、帰るぞ。流石にこの3人でスケボーは危ねえし…歩きか…30分かかんじゃねえかよ…」

「…悪かったわね。」

…ごめんなさいね？

変な事考えて…

「ああ、マジで。悪かったって…で―お前、知ってんのか？」  
っ！

「…ええ。一応。」

「ああ…ま、それは後で、な。」

~~~~~

「か、和葉君が…幼児化したじゃと!？」

「やっぱり…そうだったのね。」

—小さく、コナンが咳払いをする。

「とにかく…東京まで和葉ちゃんを運搬したって奴以外には…和葉ちゃんが幼児化したって事を知っちゃった奴はいない…って考えて、良さそうだな。」

「でも…その運搬した、ってのは誰なのかしら？」

コナンは、哀しそうな顔で続けた。

「多分…和葉ちゃんの母さんだと思う。」

「っ…」

—予想はしていた和葉だが、改めて言われて、下を向いた。

「…取り敢えず、本当に良かったよ。無事で…」
「そうね……」

「な、なあ…コナン君？」
「え？」

―前から、気になっていた事。
そして、この姿になって…さらに気になった事。

「それで…哀ちゃんって…何者なん？」
「ああ、灰原は…」

コナンが、灰原の方を向くと、自ら灰原は続けた。

「―元組織の一員。あなたを小さくしてしまった薬の開発者…よ。」
「っ…」

―「ごめんなさいね」と、少し俯いて灰原は言った。

「…ううん、うちこそ…油断してたから、こんな事になったちゃったんやし…ごめんな。迷惑掛けて…」（そっか……そうやったんや……）

―この時、和葉は…この二人の境遇を、完全に悟った。

「工藤新一」が行方不明なのは、彼が「江戸川コナン」になってしまったから。

そして、それがもし周囲に伝われば…その噂が伝わって、「殺したはずの人物が生きている」と、その組織に伝わって…正体がバレる危険性が高まる。

だから、誰にも言えない…出来る限り、伝える範囲を留めなくてはならない。

いや…出来る限りではなく、正体を伝えてはいけない。バレたしたら、決してそこから伝わらないようにしなくてはならない。

…平次も、同じような事をコナンに言われているのだろう。

そして、灰原も同様に…彼女に至っては、組織の裏切り者…こちらもまた、バレる危険性が高いのだ。

…どれだけ、辛い事か。身に沁みた。

「皆に心配を掛けているのに、本当の事を伝える事が出来ない」事が、どれだけ辛い事か。

…一体、今…どれだけの人に迷惑を掛けているのだろうか？

そして、これからどれだけの人に迷惑を掛けていくのだろうか？

もう、戻れない世界に――入ってきてしまった。

1章 お互いが、傷つけ合う存在（1）（前書き）

結論：0章はそんなに長くなかった。

1章 お互いが、傷つけ合う存在(1)

「—おはよう、蘭姉ちゃん。」

「う、うん…コナン君、おはよう。」

昨晚は、結局阿笠邸に泊まったコナンは、朝早くに事務所に戻ってきた。

「どうしたの…？眠そうだけど。」

「ちよっと、ね。」

—聞いてから、コナンは後悔した。

(そっか…蘭にも、連絡来てるよな…)
唇を、強く噛み締める。

「朝ご飯、食べてきた？」

「う、うん…食べてきたけど。」

「良かった…朝早くお父さんは仕事行っちゃって、何も作ってないし…」

「蘭お姉ちゃんは？」

たまらず、コナンは聞き返した。

「…何も食べてないや。でも、お昼でまとめて食べちゃえば大丈夫…だと思う。」

「そう…だね。」

蘭は気になってしょうがなかった。

（大丈夫…なのかな。）

―本当に、和葉は無事なのだろうか？

―本当に、和葉は生きているのだろうか？

本当なら…今頃、楽しい時間を過ごしている筈なのに。

携帯を開く。

―相変わらず、返信も、連絡も…無い。

「ね、ねえ…蘭お姉ちゃん？」

「どうしたの？コナン君…」

怖そうな目をして、コナンは言った。

「…どうしたの？その…ボタン。」

ふと気付けば、送信ボタンには血が滲んでいた。

（あれ…）

手を見て、ようやく指が切れている事に気付く。

「だ、大丈夫？」

「うん…多分。」

そう言って、蘭は再び携帯のメールを送信した。

―そして、それを見てるのが…余りにも切なくて。

~~~~~

ん…

「あれっ…」

―あ、そやった…

「んっ…」

やっぱり、慣れへんなあ…この家。

ガチャ

「あら、おはよう…ふあ…」

あれ…

「哀ちゃん、また寝るん？」

「いいえ…昨日から寝てないのよ…」  
えっ！

「…一応、ある程度は調べたわ…はい。」

あっ…お父さんの…

「取り敢えず、あなたのお父さんはやっぱり何者かに連れ去られた  
みたいね…そして、お母さんの方は行方不明…こっちは全く情報が  
無いわ。」

そう、やっぱり…

「…まあ、暇なら自分のなまえの仮称ぐらい考えておきなさい…分かっている  
でしょうけど、あなただって―正体がバレたら危険な人間…それに、  
もう博士が帝丹小学校への転入済ませちゃったから。」

「えっ！？ホンマに!？」

は、はやっ…それに、どうやったんやろ…

「―但し、『東尾マリア』は絶対にダメ。」

「え？どうして？」

別に、ええやん…あの子がまさか…

「…この子ね。」

―えええええ！？

「普通に同じクラスよ…まあ、あんまり捻って思わず元の名前漏らしたりしちゃわないように…自分に愛着のある名前の方がいいと思うけど？…一日、ゆっくり考える事ね…それじゃ、お休み…」

…え。

「あ、哀ちゃん!？」

すーすー……って、はやっ…10秒も経ってへんよ…？

「名前、か…」

…今、7時…

昨日寝てから8時間。哀ちゃんは…ずっと、調べてたんやね。

…どうして、そこまでしてくれるんやろ。  
そんなに氣い遣わんでもええのに…

…正体を気付かれたくないから、なんかな？

それだけ…やろか？

…なんで、あんなに優しいんやろ…？

~~~~~

「ごちそう、さま…」

「……」

虚ろな表情をしたまま、蘭は半分ほど食べて自分の部屋に籠っ
ちま
った。朝食も食べてないのに…
…やっぱり、心配してんだ…アイツ。

それで…体調も崩してるんだ。
—頭の中が、それで一杯なんだ。

…けれど、言えない。これだけは…絶対に。
言ったら…蘭まで、危険に曝しちまう。

…早く、潰さなくちゃいけねえ。
組織を…絶対に。

くそっ…！何してんだよ俺…！

1章 お互いが、傷つけ合う存在（2）

「なあ、お母さん？」

「ん…どうしたん？」

テーブルに座り、サイコロを握るその少女の目線の先には、震える携帯が置いてある。

「ずっと、さつきから鳴ってるんやけど…」

「あつ…」

すると、キッチンに居た母親は火を止め、携帯を開いた。

「ふう…何通も来てるやんか…一々チェックするの面倒なんやけどな…」

「それやったら、うちが消しといたげる…それが、サイレントマナーにしたらええんちゃう？メールとか電話来ても鳴らなくなるし…」
「ありがと。ほんなら頼むで。」

クスツと笑って、その少女は――投げられた携帯を掴み、受け取った。

（ホンマ、無駄な事してるんやなあ…ふふっ…）

~~~~~

「ただいまーっ…っ」と

「お帰り、おじさん。」

―部屋に入るなり、珍しく飲みに行ったにも関わらず酔っていない小五郎は辺りを見回した。

「風呂…場は灯り付いてねえし、蘭の奴、もう寝ちまったのか？」  
「う、うん…そうみたい。」

―しかし、コナンが少し俯いて言ったのを見逃さなかった。

「…あの件か。」

「そう…だと思っよ。」

今朝のニュースを見て、一体何人の人間がショックを受けたんだろうか？

和葉の親友…和葉と面識がある人間が、東京にどれだけ居るだろうか？

―友達想いで、面倒見がいい彼女が、慕われないはずもなく。

園子も、探偵団の3人も…いや、佐藤や高木、目暮にも面識は有るし、この事件を知って…ショックを受けているに違いない。

あんな優しくかった少女が―いきなり姿を消したと知れば。

…そして、全てを知っている自分が…悔しい。

知っていながら、何も出来ない…誰の力にもなれない…誰にも伝えられない…そんな自分が、余りにも…悔しい。

「…そつとしておいてやった方がいいだろう。俺が励ますよりは…くそつ…」

―自分の無力さに、小さな怒りを放つ小五郎を見て、同じようにコナンにも怒りが沸いた。

(…新一の声で電話を掛けるか…いや、それじゃダメ…だろうな。くそつた…)

『ブーブー』

(げっ！)

「ん？電話か？」

コナンは走って、トイレへと駆け込んだ。

（やべっ！やっぱり新一の方の携帯…しかも蘭から！）「そ、そうみたい…ちょっとトイレ！」

（おいおい…なんでわざわざ入って出る必要があるんだ？）

思わず、終了ボタンを押しそうになる。

（…逃げてえ…けど…）

―出たくない。今出ても、何も力になれない。

（でも、あいつが…それじゃ、何も進展しねえ。このままじゃ…前には全く進めねえ…！）

…しかし、その選択肢は選べなかった。

ネクタイに付けた蝶ネクタイ型の変声機を外し、いつものようにダイヤルを合わせた。

『ピッ』

『もし、もし…』

「蘭…か？」

『新…一。ごめんね、寝てた？』

「いや…大丈夫だ…それで…」

涙声が聞こえてきて、余りにも切ない。

―布団の中、一人すすり泣きしている姿は、いとも簡単に想像出来てしまう。

「…博士から電話で聞いたよ。和葉ちゃん…の事か？」  
『う、うん…っ…』

―掛けられる言葉は―

「……」

0。<sup>ゼロ</sup>

## 1章 お互いが、傷つけ合う存在(3)

…どうして、答えてくれないの？

…どうして、出してくれないの？

…どうして、返信してくれないの？

—和葉ちゃんっ…！

心配、してるんだよ…？

ずっと、ずっと…心配で、心配で…しょうがないのに…！

…大切な、親友…かけがえのない、親友…！

「和葉ちゃんっ…！」

……知ってるのかな…？

新一は…この事…

…あいつ、知ってる…のかな…？

ははっ…ダメだ。そんな口実作って…助けてもらおうとしてる…私。  
ダメ…逃げちゃ。現実から逃げ出したら…

でも、手は…止まらないっ…

ピッ…

あっ…

『もし、もし…』

「蘭…か？」

『新…一。ごめんね、寝てた？』

「いや…大丈夫だ…それで…」

…言つて、良いのかな…？

「…博士から電話で聞いたよ。和葉ちゃん…の事か？」

っ  
…

『う、うん…っ』

…涙が…止まらないの…

ねえ、助けて…

助けてよ………！

………ははっ

………あははっ………

何言ってるの？

私。

—無理に決まってるじゃん。

誰も……助けてくれるわけ、ないじゃん。

新  
一  
な  
ら  
な  
ん  
と  
か  
し  
て  
く  
れ  
る  
？

新  
一  
な  
ら  
助  
け  
出  
し  
て  
く  
れ  
る  
？

—あり得ないよね？

あははっ  
……

~~~~~

『……ごめんね。』

電話越しの相手の声が、コナンには明るそうに聞こえた。

「えっ……」

明るそうに、蘭はまた言葉を放った。

『和葉ちゃんが……死ぬわけないよ。大丈夫だよね……あははっ……
…何心配してるんだろ、私。』
「お、おい……蘭—」

しかし、その瞬間蘭は電話を切った。

(……っ……)

—誰にだって、あれが蘭の本心でない事は分かる。

だから、悔しかった。

—工藤新一として、何もしてやれないこと。

真実を知っている……もっとも真実に近いにも関わらず、何の手助けも出来ない。

無力な自分が、余りにも腹立たしかった。

（アイツ……）

――蘭は悟ったのだ。

もう、誰も助けにはくれない……誰に聞いたって、皆無力で――傷つけられるだけ、そしてそんな無力な姿を見せれば相手が傷つくだけ。

――お互いが、傷つけ合う存在――

だからこそ、コナンの意思は固まった。

（絶対、取り戻さねえと……！）

幸せな日常、彼女の笑顔……全てを。

1章 お互いが、傷つけ合う存在（4）

「和葉あ！」

―あたしの頭を巡る…声。

逃げてても逃げてても、その声は―あたしの頭を捉えて、放さないんや。

…もう、忘れたいんよ？戻れないかもしれへん…から。

…どうすれば、救われるんやろ。あたしは。
何すれば…救われるんやろ…あたしは。

…っ…うゝ…

朝…？あんまり寝てへんのに…？

…もう、最悪やな。ホンマ…

~~~~~

「おは…よう……」

「—あら、おはよう。」

—寝惚けたままの和葉と、すっきりした声で言う灰原。

「朝食出来てるから…さっさと支度して、食べましょ。」

「あれ…博士は…？」

—すると、灰原はその方向を指差した。

「え…朝風呂するん？」

「違うわ…実験に失敗して、体中泥まみれになったから、洗ってるのよ。」

和葉は思わず笑った。

「…面白いんやね。博士って。」

「そうね…ユニークさなら群を抜く…まあ、工藤君みたいな例外もいるけど。」

もう一度、和葉は笑った。

（結構…まだ、元気あるかも。なんや、昨日心配し過ぎたんかな…あたし…）

「…それで偽名…決まった？」

すると、ゆつくりと和葉は―灰原に手を差し延べた。

「―鳥山片葉。とりやまかたは改めて、哀ちゃん、よろしゅうな！」

~~~~~

―すると、灰原も思わず笑った。

「あなた…かなり下手ね。」

「えっ…何か悪かったん…？」

不安そうに片葉が尋ねると、灰原は言い始めた。

「『鳥』はあの煩い大阪探偵の『服部』からそのまま持ってきて、山はそのまま。そして、『片』は『ひら』とも読める…『平次』から引つ張った物ね…」

「う…」（すごっ…あたしが1時間かけて考えたのに…哀ちゃん、10秒で見破ってもうた…ダメやったかな…やっぱり…）

しかし、灰原は付け加えた。

「でも、問題無いわ。これぐらいの方が、しっくりくるかもしれないし…」

「えっ！？ホンマ!？」

「それに…あなたも、忘れたくないでしょうしね。」

灰原がそう言うと、片葉は少し俯きながら…頷いた。

「…大丈夫よ。任せておいて。」

—小さな声で、灰原は呟いた。

「ホンマに、任せてええの？」
「ええ。」

—小さな静寂を突き破って、和葉は席についた。

「絶対やで。」

「ええ。」

涙声になりかけながらも、言った。

「ありがと。」

そして灰原も、また席についた。

1章 お互いが、傷つけ合う存在（4）（後書き）

まだまだ終わらない1章…

にしても、和葉の名前は迷いましたね。

1時間、確かに考えてこれしか出ないってのも情けないですが…

―それを本当に10秒で当てられたらショックですね（笑）

1章 お互いが、傷つけ合う存在(5)

「それじゃ、行きましょうか。」
「うん!」

―「行つてらっしゃい」ただ言葉を掛けた博士に手を振って、片葉は家を出た。

「んゝ…気持ちええなあ…」

陽射しを浴びて、大きく伸びをする。

「…置いてくわよ。」

「ちよつ、待ち!哀ちゃん!」

さつさと歩き始める灰原を、片葉は追いかける。

「ええやんか…ゆっくり行つたつて…始業まで時間、あるんやろ?」

「……まあ、そうだけど?」

「あんまり早く歩かんといて…あたしやって、まだ慣れてへんし…」
「……」

しかし、灰原は言葉を返さない。

「もう……あつ―」

―片葉のランドセルから、小さなキーホルダーが零れ落ちた。

「あれっ…」

さっと周りを見渡すが―何処にもない。

「ちょっと…」

「ご、ごめんな。探してるから、先行―」

「―いったら、あなたが来れないじゃない。道のり知ってるの?」

片葉は言葉に詰まる。

「そ、そやね…ごめんな。ちょっと待ってて。」

「ええ…良いけど…」

少し曇った声で、灰原は呟いた。

「…もう、ダメね。」

「ん…見つからへんな…何処行ったんやろ…」

「―これ…かな?」

―片葉が横を見ると、屈んだ女性の掌に、キーホルダーが乗っ

た。

「うん、それ…ありがとござ…っ！」

「どういたしまして…でも、大事にするのよ？小さいから、落とすとすくなくなっちゃうから…」

—蘭。

「…私の心みたい…」
「……」

その言葉に、片葉も—声が出なくなつた。

「あ、ううん…気にしないで。じゃあ、行こっか、コナン君。」
「う、うん…はい…」

そして、二人は歩き去って行つた。

コナンはチラリと二人の方向を一度向いて—そのまま。

「…それじゃあ行きましょうか。」

「そ、そやね…」（…蘭ちゃん…怖い顔、してた…）

—あの表情。あの声。

どちらも…いつもの彼女とは、懸け離れた物。
そう、正に—輝きを失った、声。

…いつもの彼女じゃ、想像出来ないような…声。
あれ程優しくて、あれ程明るい…彼女が。

原因は—たった一つ。

（あたしが、傷つけてるんや。）
奥歯を噛み締める。

（あたしが…何にも、蘭ちゃんに言えへんから…）
—強く、拳を握り締める。

蘭という存在が、自分を苦しめる。

和葉という存在が、蘭を苦しめる。

—お互いに、傷つけ合う存在—

（全部、あたしのせいやのに…）

—何故、蘭は傷つかなくてはならないのだろうか？

…酷く心が痛んで、体を縛る。

全て、あの日—自分が、小さくなったから。

そのせいで…皆に、大きく迷惑を掛けてしまった。

…自分が居なければ、皆が笑顔でいられたのに。

自分が存在しなければ、こんな事にはなかったのに。

—最悪だ—

「…いや…」

「え？」

俯いたまま片葉が放つ―灰原が聞き取れない程の、掠れた声。

そして、顔を上げ、涙を零しながら―叫ぶ。

「―もうイヤや！こんなの！」

「ちよっ…」

片葉は逆方向に走り出した。

1章 お互いが、傷つけ合う存在（6）

「―そう、それじゃあ…」

「ええ。ちよつと体調を崩して…」

―転校生が初日から休むぐらいの事、皆に知られて何かあるというわけでもないが、余り良い印象を持たない…それも、原因が全然違うのだから、灰原は小林には誤魔化しておいた。

「でも、そんなに大した事でもないし…明日には来ると思うわ。」

「そ、そう…ありがとう。」

小林は、名簿を開き、片葉の欄にチェックをつけた。

「それにしても…」

「え？」

小林は、ちよつと不可解そうな顔で灰原を見た。

「…ちよつと不自然よね。このクラスだけどうして次々と転校生が…」

―そういえば、灰原も不思議だった。何故、次々とこのクラスにだけ増えていくのだろう。

「それに…」

屈んで小林は灰原の額に指を付けた。

「―わざわざこの学校に二人も、いきなり親戚をよこす、あなたの所の博士も不自然ね…」

「そ、そうかしら…あははっ…（そりや確かに不自然よ。そもそも親戚がどんどんその家にやって来る事自体が…）」

灰原は、ゆつくりと教員室から出て、教室へと戻った。

~~~~~

「それで…やっぱり、和葉ちゃんは…」

「ええ…拒絶反応なんでしょうね。もう…」

―昼休み。わざわざ人目につかない屋上にやって来て、二人は外を見ながら話していた。

「彼女…相当悩んでるのは、分かったわよ。やっぱり、どうしても早く戻って…迷惑を掛けている皆に謝りたい…そう考えてるんでしょうね。けれど、それが何時になるかわからない……どんどん迷惑を掛ける…そして、その最大の対象が―蘭さんだと。そう考えてたから…」

「―最大のショックを、蘭を見て…受けたってわけだ。」

―朝から、コナンも…やはり、蘭の異変に気付いていた。

珍しく、朝食を作るのが小五郎になっていて…蘭は、ずっと眠っていた。

学校には何とか向かったが、ショックが拭い切れない様子。

―コナンにも小五郎にもそれは伝わったし、蘭自身もそうだった。

…どうやったら、元に戻るのか。

「……」

「―追い詰めんなよ。」

「え？」

灰原は、問い返した。

「…自分を追い詰めんなよ。お前が自分を追い詰めたら…全て、0に戻る…終わりなんだからよ。」  
「……」

暫く黙って、灰原はドアを開き―呟いた。

「分かってるわよ。そんな事。」

そして、コナンが通り抜けて―ドアは閉まった。

~~~~~

「蘭…大丈夫？」

朝から、熱っぽい。

「う、うん…何か。」

「何とかじゃないよ…保健室行った方がいいんじゃない？」

さっきも先生から質問されたけど、頭がボケツとしてて…答えらんなかったや。

やっぱり私…変になっちゃったのかなあ？

「…大丈夫だよ…」

そう、これから昼休み。

「少し寝れば、元気になるって…じゃ、お休み…」
「あっ、ちよっ…」

…このまま、机に突っ伏して…

―寝たふりしておこう。

そうすれば、誰も心配しないよ。誰も…

…寝ようとしたって、寝れやしない。

和葉ちゃんの事、ばっかり考えて…私の頭の中が、眠らせやしない。

… 眠ったら、和葉ちゃんも眠っちゃう…
そう考えさせて、眠らせやしない。

… もう、狂い始めてるって分かってるのに… どんどん、自分は踊り
狂って行く…

和葉ちゃんは、何を考えてるだろう？
でも… 多分…

— どこまでも傷つけ合う、私達。
そんな事、考えてるんだろうな。

… 和葉ちゃん… お願いっ…！
戻ってきてっ…！

『ポタツ』
—小さな、
雪下。

1章 お互いが、傷つけ合う存在(6)(後書き)

感想、評価、待ってますm——(m

1章 お互いが、傷つけ合う存在（7）

―もう、何にも触れたくない。

家に駆け込んだあたしを、博士は驚いて見たんやろな。
でも、あたし自身が分かってた…凄い目で、博士睨んだんや。

…何やってるんやろ。ホンマ。

「誰も傷つけない」

―無理や、そんなの。

誰も傷つけずに…この事件を解決する事。

無理や…そんなの。

—そもそもお互いが、傷つけ合う存在なんやから—

~~~~~

「蘭、蘭…」

えっ…？

「…さっきから、携帯鳴ってるよ？…メール？」

「あつ、そうだね…」

…寝てた？ううん、違う…意識が無かったのね。

メール…か。

…和葉ちゃんだったら、良いのにな。

『ピッ』

『…今日は少し早めに帰ってきてくれ。 小五郎』

…違うよね。やっぱり。

そんな都合よく…

『プルルル…』

わっ……電話？

もっ…お父さんかな……あれ、公衆…電話？

『ピッ』

「はい、もしも…」

「ー蘭ちゃん？」



…え？

『蘭ちゃん…なん？』

…え、え？

『返事して！蘭ちゃん！』

「どうしたの？蘭……」  
「……かず、は……ちゃん……」

――声。

『蘭、ちゃん……ごめんな。約束、すっぱかして……いきなり、消えたりして。本当に、ごめんな。』

—綺麗な関西弁。

「…ははっ…」

—和葉ちゃんしか居ない。

…嬉しくて…止まらない。

—これを、涙って言うんだよね。

「良かった…和葉ちゃんっ…！」

~~~~~

蘭は、ゆっくりと屋上に出た。

「でも…本当に、良かった…和葉ちゃん…」
「…ううん、本当にごめん…」

頭の中に、電話越しで謝り続ける和葉が浮かんでくる。
—もう、戻ってきてくれたから、何も気にならなかった。

「それで—」

そして、一番聞きたかったこと。

「今…どこに居るの？お父さんとかと一緒？」

『なあ…蘭ちゃん。』
「え？」

—いきなり和葉が、重い口調で告げた。

『あたし、今…どこから電話掛けてると思うっ?』

「どこって、公衆電話…」

『半分正解。確かに公衆電話やな。これは…』
「…ま、まさか…」

—「ふふっ」と笑って、和葉は言葉を継いだ。

『…海外や。どこかは言えへんけど…』
「!—」

—蘭は絶句した。

『ごめんな…逃げ回ってて。こうせんと…捕まってまづかもしれへんやろ?』

「でも、でも………」

次の言葉が出ない。

『あつ…もう、お金あらへんわ…』
「え、ちよつと…待って！ねえ…」

和葉は落ち着いて、続けた。

『なあ…蘭ちゃん？』
「え…」

『一つ、お願い…聞いてくれへん？』

小さく、蘭は頷いた。

「…うん。」

『…あたし、絶対戻ってくる。やから…内緒にしてて？この事…蘭ちゃんの胸だけに、留めておいてほしいんよ。』
「……」

和葉は続けた。

『今、あたしは見つかつたら大変な事になる…やから、逃げてる…必ず、戻ってくるから…蘭ちゃんの所に…皆の所に…やから。待っててくれへん？』

「じゃあ…私からもお願い。」

『え？』

――蘭の表情から、既に涙は消えていた。

「――和葉ちゃんが帰ってきたら、行こうよ。二人だけで……ね？今度こそ……」

『…うん…！約束する！』

―その言葉と同時に、電話は切れた。

（…大丈夫なんだ。和葉ちゃん。）
無事だった。

（…和葉ちゃんは、今頑張ってる……私が、壊れてたら……和葉ちゃんだって、哀しむじゃない。）
そして、自分自身が―前を向く。

（頑張らなくちゃ…！）

―心が通い合った。少なくとも、蘭はそう思っていた。

2章 無力(1)(前書き)

導入。かなり短いですm(――)m

2章 無力(1)

「ふざけんとき…悪趣味女。」

静かに、その少女は刃の先を女性に向けた。

「―アンタの秘密…何時でもバラせるんやで？それが分かってて、今の電話したん？」

―女は、答えない。

「次やったら…許さんよ。」

~~~~~

「…今、9時ね。」

夕食を食べに来る気配は―全くなく、ずっと部屋に籠っている様子だった。

コナンは、学校が終わって、蘭と会う事無く、そのまま直接灰原と一緒に阿笠邸へ帰って来た。

「…本当に、ごめ―」

「だから言っただろ！今それ言っただけ…こんがらがらるだろうが頭が…」

―俯きながらの灰原の謝罪を、コナンは無理矢理遮った。

「何を言えいいんじゃない…片葉君、相当参っておったし…」

「…」「…」

何も思い浮かばなかった。あんな精神状態の片葉に…掛ける言葉が。

「…蘭が原因なのは分かりきってる。けれど…だから、逆にアイツを助けられるのも…」

「…蘭さんだけ…って…事…？」

—コナンの頭の中に、不可能の文字が渦巻く。

守れないのだろうか？彼女の心は…  
守る事は、出来ないのだろうか？

（…蘭だけじゃねえ…守らなくちゃいけねえのは…）  
—コナンの足は、ゆっくりと階段へと進んでいた。

## 2章 無力(2)

その女性は、何があつたのか分からない―そんな様子で、その少女を見た。

「どういうこと…なん？そもそも、この電話は―」

「…命令、やる？でもうちに一つ話通してからやるんやな…後処理、面倒なんやから。」

―少女は、歩き去って行く。

「後処理…？」

その口元に、微笑が浮かぶ。

「必要ない思ってたけど…まさか、このクラスに来るなんて、想像してへんかったわ…」

~~~~~

「―待つて。」

灰原が、コナンを呼び止める。

「何だよ…灰原。」

「まさか、あなた―彼女に会いに行くつもり？」

―もう既に、その瞳が「ダメ」と言っているような物だと、コナンには理解出来た。

「…ああ。」

灰原は何も言わなかった。

「――蘭みたいになってほしくない……いや、それ以上の苦しみを味わって欲しくない、そうだろ？」

「っ……」

――暗闇の底へと叩き落されたような、あの蘭の表情。

自分に責任がある事が分かっていたから、一日「落ち着いた様子の自分」を作り出し、灰原は凌いでいた。けれど、同じように自分に責任があると感じていた少女は――どうやっても耐えられなかった。

「……心配すんなって。」

――意思が、コナンの心を動かし続けていた。

「……決めたんだよ。取り戻すって……」

一段、一段と階段を上がる。

「……だから、心配すんなって……」

灰原の見えない闇の中へと、消えて行った。

~~~~~

…外に、出なかつたら良かったんやろか。

あんなの、蘭ちゃんやない。

…けれど、蘭ちゃんや。

…あたしのせいで、あぁなつてもうたんや。

あたしが…「遠山和葉」が行方不明になんかなくてしもうたから…

…あんな真つ暗な顔した蘭ちゃんが…生まれてしもうたんや…

あたしのせいで…あたしのせいで…

…どうしたら楽になれるんやろ。

―風が、気持ちいい。

下を見れば、分かる。

―次に、何すればええか…

下に逝けばいいんや。あたしが。  
そうすれば…楽になれるんや。

…小さくなんか、なりとうなかった…

『コンコン』

…哀ちゃんやろな。きつと…  
博士やったら、階段で足音が聞こえてるはずやし…

…でも、よう考えたらあたしのせいだけやないやん。  
哀ちゃんや…どうして、こんな薬作ったんやろ。

…けれど、今は関係ない事や。あたしが死ねば…全て終わるんやから。

『―和葉ちゃん？』

えっ…

『悪いね…こんな時間に来ちゃって……ドア開けなくてもいいからさ、聞いてくれないかな？』

## 2章 無力(3) (前書き)

ようやく、全ては始まった感じ。

## 2章 無力(3)

『悪いね…こんな時間に来ちゃって……ドア開けなくてもいいからさ、聞いてくれないかな?』

新一、君…

『—本当に、ごめん。』

えっ…?

『こんな事件に巻き込んで……どれだけの人に、俺が迷惑掛けたか……』

でも…

「でも、それ—新一君のせいじゃないやん…」

別に、新一君は何もしてへんし…

—あたしのせいやん。全部。

『…かもな。けど、俺が居なければ—和葉ちゃんは巻き込まれなかったかもしれない……俺に関わったから、組織に狙われたかもしれない……本当に、ごめん。』

………

『…ねえ、和葉ちゃん。』  
「何？」

『―服部ってさ、こついつ時…来ると思うか？』  
えっ！？

「来るって…」  
『いきなり、ずっと現れて…』何してんねん『って。』

………

『…もし来たら、嬉しい？』  
っ…

『ー呼びたいよな…ホント。』

なんでっ…

なんで、今…そないな事っ…

そないな事言っん…？

『…呼びたいよ。凄い。あいつ呼んだら、多分…もやもやがすぐ吹っ切れるんだと思う。』  
「……」

『…俺じゃ、代わりにもなれねえや…ははっ…』  
「新、一…君。」

『…俺さ、決めたんだ。』

「……………うん。」

…何を？

『俺じゃ無理だとは思っけどさ、和葉ちゃんが――元に戻るまで、アイツの代わり…やらせてもらえねえかな？』  
「っ…」

『いや、絶対無理――アイツの真似なんか出来っこないけどさ。』

…ダメッ！

『…でも、必ず…守るから。』

――要らん！絶対！要らんって…！

『――笑ってほしいんだ。』

……え……？

『……蘭の大親友だから。アイツの……無謀だよな。何してんのかも分からねえや……』

……あ……

『……俺らのせいだから、償いにもならねえけど……笑ってて貰いたいから……蘭にも、勿論――和葉ちゃんにも。』

つあ……

『――我儘だけど、お願いしたい。そしたら……絶対に、守るから。』

~~~~~

『ボタン』

―その瞬間、ドアが開いた。

「え……」

目の前には、今も噤り泣きをしている―一人の少女。

「うわああああん!!」

「…わっ…」

いきなり、片葉は―コナンに飛びついた。

「うつ、うつ…つわあああん！」

「おっ、おいおい……」

驚きながらも、ゆっくりとコナンは片葉の髪を撫でる。

「うつ、っ……」

「—ごめん…な。」

—少女はずっと泣き続けた。
何もかもを…流し出すように。

そして、陰に隠れていた少女も—一粒零して、階段を下りた。

―自分の無力さが痛い程分かっているから、打ちひしがれて
どうしようもないから、諦めかける。

けれど、無力だから…何も出来ないなんて事はない。
いや…無力な人間なんていない。

―人間に、無力な存在なんてない。
誰一人として…そんな存在は居ない。

それぞれに強い力がある。

だから…誰だって、立ち上がれる。
必ず、強くなれる。

―蘭も。

―灰原も。

…片葉も。

絶望に浸ったって、いつか未来を取り戻せる…そう信じれば、叶うはず。

—だからコナンは、前へと踏み出した。
未来を取り戻す為に…迷惑を掛けた人達の為に。

でもまさか、こんな出来事が—全てを変えて行くなんて、思いもしなかった。

…人の心は、強いけれど、繊細で—無力じゃないけど、本当は脆い。

3章 一人っきりのお前に（1）

―いきなり居なくなつた人の笑顔は、忘れられない。

会えなくなつた人間は、笑顔だけをその場に残していく。

記憶の中には…名前と一緒に、表情が残る―大体は、笑顔。

最後に、こっちを向いて手を振つて―笑顔で別れの言葉を放つたのだから、尚更記憶に刻まれていた。

そして、その表情が―明るい向日葵のような和葉の顔が、平次の頭の中では更に輝いて見えていた。

（…和葉。）

頭の中で、その言葉を繰り返しただけで、少しずつ痛めつけられていくような感覚。

それは―襲われた事の無いような…哀しさ。

どこまでもどこまでも、追いかけて来る…激痛。

（…あの姉ちゃん、同じような…感覚やつたんやろうな。）

今だから分かる、蘭の辛さ。

新一が居なくなつた時の…蘭の苦しさ。

…そして、今度は―和葉が居なくなつた。
またしても…蘭は同じような思いになつたのだろつ。

―勿論、平次にも同じ感情が芽生えていた。

(…何もやる気起きへんわ…)

今回、平次が手出しし辛い理由は―被害者が、和葉そして…銀司郎、大阪府警の刑事部長だつたという事だ。

『警察関係者に、この事件に関わっている人間が居る』
―という可能性が、高まっているという事。

そうなれば、そう簡単には調べられない。
インターネットを中心に情報を集めてはみたが、大した情報はない。
そして、和葉の家の付近にすら、近寄る事は出来ない。

―これでは、西の高校生探偵にも調べようがなかった。

(…あゝくそっ！)

机を叩き、大きく伸びをした所で―教師に睨まれた。

(……どないしょ、今度の日曜……)

―恐ろしく暇だという事を思い出す。大会の為の、剣道の練習ぐらいしかやることがない。

(…そや、工藤や。)

そうすれば、他の選択肢は…一つしか思い浮かばなかった。

(まあないやろけど…なんか知恵、貸してくれるかもしれへんのは…アイツぐらいやからな…)

大きく欠伸をして、平次は机に突っ伏した。

~~~~~

「わぁー…ほんま緊張するなあ…」

―朝から、やけに片葉はそわそわしていた。

「大丈夫だって…マリアちゃんも居るし、別に関西弁使っても普通に馴染めると思うぜ？」

「そ、そう…かな。やとええんやけど…」

少し心配そうに、片葉はコナンを見た。

「まあ、あんまり心配しても仕方ないんじゃない？所詮、小学校の自己紹介、小学校の人付き合い…落ち着いて対処すれば、何も…」

「―お前、その程度に考えてたのかよ。」

わざとっぽく、少し怒ったようにコナンが灰原に尋ねた。

「あら…悪い？」

「…あいつらに、同じ事が言えつか？」

少し灰原が、首に手をやる。

「そうね…まあ、一応。」

すると、コナンはにっと笑った。

「―言えないってわけだ。」

「ええ…まあ、ねっ！」  
「ぎゃっ!!」

灰原が、コナンのランドセルを蹴っ飛ばすと、前のめりになって倒れた。

「痛ってえ…お前…」

「わざわざ『一応』の後を補ってくれてご苦労様…」

灰原は少しだけ笑った。

「…仲ええんやね。」

「―これで仲良しなら世界中全員お友達よ…」

―そうこうしている内に、校門の前に辿りついた。

「えっと…こっちやったっけ？」

「ああ…その門通って、すぐ目の前の扉を開けたら、小林先生が居るはずだから…顔知ってたっけ？」

「うつん…初めて。」

「まあ、すぐ分かると思うけど…見つけたら、後は始業のチャイムの時に、連れてってもらえるはずだから…ま、頑張れよ。」

「う、うん…」（だ、大丈夫かなあ…こんなの、何年ぶりやろ…）

心配そうに、和葉は一人―奥の門を通り抜けた。

「…なんか、大変そうね。」

「え？何が？」

灰原は少しだけ笑みを浮かべて、歩き出した。

「別に、何でも無いわ。」

### 3章 一人っきりのお前に(2)

「ー今日、転校生が来るらしいよ！しかもこのクラスだって！」  
えっ！このクラス！？」

「転校生って…またですか！？」  
…普通、そう思うよなあ。

「また…って、そんなに不思議なの？」  
「マリアちゃんが転校してきて、数ヶ月しか経ってませんし…それに…」

「ーこのクラスばかりに転校生がやってくるのは不自然…そうよね？円谷君？」

「は、はい。」

そもそも可笑しいんだよ。…俺が入って、灰原が入った時点で、もう他のクラスに人数並んだ。

そしたら、マリアちゃんも入ってきて、そして今度は和葉ちゃん…他のクラスより二人多いってのは可笑しくねえか？

「ねえねえ、知ってた？お隣のクラスに、双子の転校生がやってきたんだって。」

「へー…でも、別々のクラスなんだね。」

「ちよっとかわいそー。」

…へえへえ。分かりました。ありがてえ情報ですね。

「ねえ、どんな子かな？」

「うーん…男、女、女…男？」

「女だろそこは！」

どっちでもいいだろが…

「―おとなしそうな子がするな…哀ちゃんみたいな。」

「転校生って、皆妙に大人っぽい人が多いですよね…」

そりゃそうだ…マリアちゃん除いて、本当は高校生なんだから…

でも、確かにマリアちゃんもしっかりしてるといえぱしっかりしてる…か。

って、結構俺も気にしてんじゃねえか…

「ふふっ…」

笑うな！

~~~~~

き、緊張するなあ…

…こんな所に居るなんて…予想もせえへんかったし…ああ…

「えっと…教室はここよ。さあ、入って…」
わっ…

ガラッ

—え、ははっ…

「転校生の、鳥山片葉ちゃんです。皆、仲良くしてあげてね。」

『はい！』

「はい、いいお返事です。」

（なんか、こんなシーンあったよな。）

（わざわざ原作を読ませてようとしなの…）

な、なんかそこだけ、会話してる…

（何か言ったかお前。）

（別に…？）

…新一君が負けたみたいやね。

「えっと…それじゃあ、鳥山さんの席は…」

『ガタッ』

「先生！ここ、ここ！俺の隣空いてまゝす！」

（歩美ちゃん、こんな事、前にもありましたよね？）

（大丈夫だよ。元太君はもう少し痩せて、知恵の実食べないと、お隣には座ってもらえないよ。『ここ』も一回増えるし…そのマリアちゃんの隣になるよ。）

（…何でもありません。）

…なんか、そっちも小学生レベルやない会話してるような…

ま、そこでえつか…別に…

「―すぐそこでいいわね。東尾さんのお隣に座ってくれるかな？」
「は、はい。」

「ちえっ…」

(…この前と展開、違いましたね。)
(この前…ああ、哀ちゃんが転校してきた時だったんだ。)
(まあ元太君が不幸なのは変わりませんが…)

…またなんか言うてる。

「それじゃあ、出席をとりまーす！」

…始まるんやなあ。これから。

3章 一人っきりのお前に(3)

「片葉ちゃんって、大阪から来たんだね!」

「マリアちゃんと同じですね!」

「ま、まあ…そやね。」

「ねえ…片葉ちゃん、少年探偵団に入らない?」

「え、え?」

「団長はこの小嶋元太だ!」

「ま、まあ…時々、事件に関わったりとか…」

「おねがい!」

「た、ただ、いま…」

「お帰り、片葉君…大丈夫か?」

「ま、まあ…」(なんや…あのノリ…)

半ば強制的に―少年探偵団へと放り込まれた片葉は、とにかく一日振り回された。

探偵団―元太と、歩美と、光彦が…次々とエピソードを紹介していく。

…片葉は4つ目ぐらいで、聞き飽きた。

「今…5時やね。」

ランドセルを背負ったまま、靴を脱いで、自室へと戻った。

~~~~~

「どうやった？」

「え？」

その日の夕食、いつもは話しかけても来ない彼女が、いきなりマリ  
アに話しかけてきた。

「転校生が来たんやろ？どんな子？」

「どんな子って…」

― 答える気にもならない。

「… 関西弁の女の子やったよ。」

「へえ… 和葉みたいなの？」

見事に的中したのを、悟られないように、マリアは曖昧に返した。

「そやね。似てるっちゃ似てる…」

「似てるっちゅうと…」

「ーけど、多分ちゃうね。茶髪やったし…」（少し、染めたんやろな。ま、見破るのは容易やないやとは思っけど…）

「残念やなあ。」

ーその女性は呟く。

「ー赤みがかった茶髪とかやったら、今度の授業参観辺りを見に行くんやけど…」

ーマリアが転校してから、いよいよ3ヶ月が経つ。そろそろ、2学期も終わりに近付いていた。

（隠し通すのも…そろそろ、限界なんかな。）

一度は怪しまれたその正体も、上手く写真をすり替え、その疑いを消した。

ー全ては、親しき人の為にー

(…見つかったら…殺る時やろか。)  
腰の裏に隠してある、刃物が―僅かに心を持って動いたような気がした。

「…ふふっ…」

「え？」

その女性は、静かに笑みを浮かべる。

(ジン…せいぜい、死までの時間を、充実して過ごすんな…ふふっ…)

### 3章 一人っきりのお前に(3) (後書き)

今週の土曜日(笑)までしばしお待ちを…平次君も、出番を待っています。

### 3章 一人っきりのお前に(4)

—こんなに上手く行く事って、あるのだろうか？

蘭さんの事を考える度に、痛む心。

—偽りの笑顔を、目に入れないようにしてた。

…工藤君も、気付いたわよね？

—蘭さんの笑顔に、輝きが戻っていた事。

…お姉ちゃんを思わせる、絶対に届かない輝きが、完全体とは言わないまでも、彼女を支えていた。

—何故、彼女が輝きを取り戻せた？

暗闇から救い上げる…何かが。

…工藤君が関与しなくても、何かしらの影響を与えられた？  
彼女の心に響くような、

—あのお嬢様が、それとも……いいえ、まさか…

~~~~~

~~~~~

「……」

「—良かったなあ。」

「え？」

「—蘭ちゃん、思ったより元気そうやん…そう思っやろ？」

「あ、ああ…そうだな。」

「ええ事あつたんかな…何か、ええ事。」

「…かもしれねえけど。」

「やったら、ええねっ！」

「…ああ。」

~~~~~

―それこそ、和葉ちゃんはあっという間にクラスに溶け込んでいった。

本当に、小学生に見える。

元太達に少年探偵団に誘われて、即答でOK出して…

―本当に楽しそうに笑って。

―本当に嬉しそうに話して。

…ずっと、和葉ちゃんの机の周りには人が絶えなかった。

―いや、それって凄え良い事なんだけどさ。でも、不思議だよな。適応力が凄いつていうか…何というか。

…最初、少しうろたえてたけど…マリアちゃんに何か言われた後は、凄く落ち着いてたよな。何て言っただら…

…ま、いいけどな。

それでもって、優しくて、凄く明るい…蘭みたいな感じかな。

―不思議なのは、蘭だ。

元気が戻った、あの表情。

…家に戻っても、今日は元気そう。

…どうなんだろうな。こんな事を不思議に思ってるなんて…俺もど
うかしてるのかもな。

何か良い事があったから…そう決まってる。

―けれど、それがなんなんだろう。

…和葉ちゃんが幼児化してから、何もかも上手く行き過ぎてる気がする。
する。

都合よく…一つ一つ、問題が解決されている気がする。

…全てが跳ね返っては来ないだろうか。
これまでの幸福が…一瞬で、暗黒になって。

…でも、させねえ。

3章 一人っきりのお前に(4)(後書き)

いよいよ3章後半に突入です！

次回もよろしくお願いしますm(_____)m

3章 一人っきりのお前に(5) (前書き)

進まない話。進む時間。

3章 一人っきりのお前に(5)

「―おっはよー！コナン君！」

金曜日。彼女がこの米花町にやってきてから…5日間。
学校に登校するのは今日が4日目だが、すっかり慣れてしまっている。

…なんで、あんな元気な声が出せるのかしら？

彼女が明るい女性だという事は知っている。けれど、それをこの場で出せる？

自分の本来の姿勢を、揺れる精神状態をコントロールして発する事が出来る？

…ちょっと、信じられない。

「なあ、コナン君。昨日…」

―彼の、お陰なの？
あんな推理フェチの？

「あつ、おはようございます。蘭お姉さん。」
（―おはよう、蘭ちゃん。）

「ふふっ、おはよう。」

そして、一番嬉しそうな瞬間。

~~~~~

『キーン、コーン…』

―早く感じるもんやなあ…授業が10分ぐらい短くなっただけやけど…

もう、今日全部授業終わって、後は帰りの会だけ…早いなあ。

…ん？

「何読んでんの？コナン君。」

図書館…から借りたんやないね。

「—この図書室のミステリーの棚、全部読み切っちゃったからよ…  
…じゃあねえから、家から持ってきた。」

「へえ…コナン君らしい—ええ！？1年間で！？」  
いくらなんでも、それ早すぎるんとちゃう！？

（ちげえよ…殆ど全部「工藤新一」の時に読んであったから。新しく入ってきたのを数十冊読んだら、もう全部読み切った事になるだろ？）

（あ、成る程…にしても…よう読んだね。それでも多いと思うけど…）

（…服部は読まねえのか？）

そういえば…平次、あんまりそうゆうの読んでる所、見いへんなあ。

（うん、これくらいの頃はずっと外で暴れ回ってたし…）

（ま、それが一番かもな…小学生は…ん…ふあ…）

…平次、何してるんやろか。

…迷惑掛けてる…やろな。

（―心配すんなよ。）

（え？）

（アイツ…そんな柔じゃねえしさ。それに……大丈夫だよ。ちゃんと…元に、戻れるからさ。）

……そやな。

「それでは、帰りの会を始めます…皆さん、席についてくださーい！」

（…ありがと。）

（ああ。）

優しいんやね。新一君。

ホンマ…嬉しい。

3章 一人っきりのお前に(6) (前書き)

久々。

### 3章 一人っきりのお前に(6)

「ただいまー…あれ？」

誰も居ない事務所の中を見渡して、ふとコナンは焦った。

(おっちゃん…鍵掛け忘れてったのか？蘭はまだ学校だし…まったく、不用心だな…)

ランドセルをソファに置き、自分もそこに座る。

(…?)

ふと、部屋の隅に置いてある、見慣れない荷物に気付く。

(…誰のだ?)

『ジャーン』

…この音で、コナンも理解した。

(そうか…トイレに居るのか。依頼人だろうな…すると、おっちゃんは少し上行ってるのかな…)  
ドアが開く。

「…え」

「よっ。工藤…元気にしとったか？」

アポ無し野郎を目の前にして、コナンの脳内処理が大きく遅れた。

「服部い！？」

「なんや…そんな驚く必要ないやろ。」

「いや…だから…」

ガチャ

「ったく…コナン。仮にも年上の奴を呼び捨てにするんじゃないぞ。」

小五郎が、事務所に戻ってきた。

「は、はい。」（てめえ…何しに来た！）

「ま、まあ…取り敢えず、このガキ連れてその辺うろついてくるわ…ほな、またな！」

すると、平次はコナンを抱え、自分の荷物を持って飛び出て行く。

「夕食までには戻って来いよ」と、言いそびれた男の、溜息だけが、

事務所に残った。

~~~~~

「…で。何しにきたんだよ。お前。」
呆れたように、コナンが再び聞く。

「まあまあ…そんなつれない顔せんといってくれや。こっちやって忘れてただけ…」
「バー口オ。それが命取りなんだよ。あそこで蘭が居たら大慌て物だぞ。」

軽く笑い飛ばす平次。

「ま、そうしたらお前のせいやな。」
「へえ、へえ。」

「……良かったわ。」
「え？」

少し間を置いて、平次は言った。

「お前の所に会いに来て、良かったちゅう事。」
「え……」

寂しそうに、続ける。

「……知ってるやろ？」

『和葉の事』

「……ああ。」

蘭の気持ちよりも、更に複雑な物が――コナンの心を襲う。

「……アイツ、元気やとええけどな。」

平次は、空を見上げた。

「
…だといいな。
」

コナンは、下を向いた。

3章 一人っきりのお前に(7)

思わぬ誤算だった。土日の日程を、突如剣道の練習試合で埋め込まれたのである。

…しかし、それでも平次の「親友に会いたい」という感情に、揺らぎは無かった。

すぐに平次は予定を変更し、金曜日―風邪を偽って早退し、東京まで来たのであった。

…孤独を埋める為か。

…知恵を借りる為か。

計画を立てたら、後はすんなりと予定通りに進んだ。

「なあ…工藤…」

米花公園に辿り着き、少し枯れた声で、平次が尋ねる。

「何だよ。」

怒ったように、コナンは聞き返した。

「…和葉、今何してると…思う?」
「…さあな。てか、お前の方が分かるだろ?」

草むらに、横になった。

「…一人っきりなんやろな。」
「……」

小さく笑って、平次は伸びをした。

「…どう思う?工藤…」
「…何をだよ。」

さらに、コナンは苛立って行った。

「…和葉の、事。」
「……」

「—あいつが、今…何して—」
「煩えよ。」

コナンは冷たい声で、言い放った。

「…え？」

さらに、冷たい声で続ける。

「―煩えつつてんだよ。いつもいつもお前は『和葉ちゃん』の事しか考えてねえのか？」

―平次の顔を睨みながら、コナンは続けた。

「お前が『和葉ちゃん』に囚われてちゃ、永遠に『和葉ちゃん』は戻ってこねえよ。」

「なんやと!？」

起き上がって、平次はコナンの首根っこを掴んだ。

「何抜かしとんじゃボケ！」

「―事実を言っただよ。」

怒り狂う平次をよそに、コナンはずっと冷静だった。

「…くそっ！」

コナンを叩きつけるように、腕を振り下ろし、放した。

「まったく…つまらない話しに来やがって。」

「……」

パン、パンと付いた草と土をコナンは払い落とす。

「――二度とここに来るな。虫酸が走るんだよ。こっちは。」

「……」

なおも、コナンは続けた。

「お前がこつち来て話す事なんざ分かりきってた…どれだけ和葉ちゃんが好きぐらい、誰だって考えりや分かるだろ？それに…この事件。お前の手じゃ負えねえだろ？」

「っ！」

既に、コナンは理解していた。今回の和葉の事件に対し、深く関わろうとする事は――不可能であり、無理矢理にでもやろうとすれば死、または正体がバレる危険性が高いという事。

「警察関係者…それも上層部が関わっていると来たら、全然情報は広まらねえよな。」

そして、黙り込んでいる平次を見てコナンは笑った。

「なあ、服部。」

「え？」

「—この事件、さっさと諦めとけ。」

3章 一人っきりのお前に(7) (後書き)

平次の土日が消えた理由？それは「ピー」です。

…どうでもいい前書きはさておき(笑)たくさんのお気に入り登録
ありがとうございますm (——) m

この小説、更新の中軸ですから…頑張って行きたいと思います。

感想もよろしく願いますm (——) m

3章 一人っきりのお前に(8)

「…は？」

可愛らしい笑みを浮かべながらも、冷静に言い放つその少年が―今日ほど憎いと思った日は無いだろう。

「だから、諦めろつて。何度も言うけど、お前の手に負える事件じゃねえだろ？現場付近からすら情報が手に入らねえんだから…さ、諦めろ。こんな事に時間を浪費する必要は―」

―もう、怒りなどとづくに通り越していた。

「―工藤…!!」

コナンは冷静な表情を変えようとはしない。

「お前：わかつとるんか！このままこの事件を放っておいたら―いや、お前には関係ないかもしれへんけどな。けれどな…！」

しかし、次の言葉をコナンは待たない。

「―分かってねえのはお前だろが。その犯人がまだ和葉ちゃんを殺してなかったとしても、和葉ちゃんをお前が探そうとしたら尾け回されて、見つけたら最後、お前もろとも巻き込んで処分して終わらだろが。そんな事もわからねえのか？」

「っ…」

「―もし、お前が手を出さなければ和葉ちゃんが無事に戻ってくるチャンスはある…そうだろ？何か言ってる事間違ってるか？」

ゆつくりと、平次はコナンを降ろした。

「…ああ。気に喰わんくらい正しいわ。」

すると、コナンは軽い口調になる。

「……ま、流石に二度と来るなは言い過ぎかもな。」

「……」

「蘭さえ良いつて言えばいいからさ、俺ん家泊まってくか?」

平次は、小さく首を振る。

「いや…明日、ちょっと剣道の試合があるから…悪いけど、もう帰るわ。」

「そうか…じゃあ、またな。何時でも来いよ。」

ゆつくりと、制服姿の青年は歩き出した。

―底知れない哀しさを抱えながら。

~~~~~

…お前と、何日間話してないんやろか。  
でも、絶対に忘れはせえへんかった。

…お前の事は、絶対に。

―和葉。今、何処に居る？  
いや…今、居るか？

…それだけでも、教えてくれへんやろか。  
今忙しいかもしれへんけどな…それぐらいは、何とか出来へんか？

…和葉。頼むで。皆心配してるんや…工藤やって、ああは言ったけ

ど…心配してるんや。

探偵事務所の姉ちゃんやって…皆、心配してるんやから。

…なあ、和葉。

…和葉。

—一人つきりか？

今、一人か？

…辛い？

どうや…辛い？お前…

…支えられたら、支えたいんや。  
やから…

…寂しいなら、来てくれ。ホンマ…頼むで。和葉。  
何時でも…何時でも…

…俺も、出来る限り探す。

…戻ってきたら、待ってるからな。

—皆で、笑顔で待ってっからな…

…届くとええな。  
この言葉…

―一人っきりのお前に―

## 間章 例えば、そんな日常（1）

「何読んでるん？」

横から、ひょっこりとその少女は小さな顔を出した。

「それ…図書室の本？」

コナンが持っていたのは、小さな推理小説だった。

「あ、いや…（前も言っただけど）あそこの推理小説は全部読んじま  
ったから…」

「えゝっ！？あんな沢山あるのに!？」

「ばっ、馬鹿！」

思わず大きな声を出す片葉に、コナンは口元に指を当てた。

（あっ…そっか、そやった、そやった…）

—ようやく、前にまるつきり同じ局面があつた事を思い出した。

（ま、まあな…取り敢えず、全部読み終わっちまったから…最近  
は買える小遣いで厳選したのを買って読むしかねえから…）

（ふうん……）

(…?)

しかし、横から片葉は相変わらずコナンの顔を覗き込んでいた。

(あつ、ごめん…邪魔やった?)

(…別に、邪魔じゃねえけど…なんか、俺の顔についてる?)

片葉は首を振った。

(ちやうちやう。そういう事やなくて…)

―少し間を置いて、片葉は言った。

(―コナン君を、新一君に置き換えて…見てたんよ。)

(え?)

少し顔を赤くして、片葉は続ける。

(やって…新一君、何回かしか会ってないけど…格好良えやん。)

(ちよっ…)

(…コナン君が、新一君だって知ったら…そう見たくなる……う、うちの場合やけどな。馬鹿なうちの場合。)

(…くっ…ふふっ…)

(ちよっ…笑わんでもええや、ん…)

コナンは、少し笑って、片葉に言った。

（いや…面白いなって。和葉ちゃん—）

「和葉ちゃん？」

「わっ！！」

—反対側から、もう一人の少女が逆に顔を出してきた。

「もお…コナン君。『和葉』ちゃんじゃなくて『片葉』ちゃんでしょ。和葉お姉さんと間違えちゃだめだよ。」

「あ、あはは…ごめんごめん…」（あつぶね…って…灰原…）

ふと見ると、灰原がくすくすと笑っている。

「それより…ねえ、コナン君！」

歩美が、元気な声で言った。

「な、何？」

「—今度の土日、キャンプ行こうよ！今日、博士の家で相談するの…ね、行こう？」

すると、すぐに歩美は片葉ちゃんの方に顔を向けた。

「片葉ちゃんも行く？」

「うん！行く、行く！」

（っておい…俺はもう無理矢理行くなって決まったのかよ！）

コナンが一人で突っ込む中、勝手に話は進んで行く。

「今日博士の家に集まる！…哀ちゃん、博士大丈夫だよね？」

「ええ…今日は何も用事はないはずよ。」  
「それじゃあ、決まり！」

(…ははっ…流されちまった。)  
(ふふっ…あ、新一君。)

ひそひそと、片葉は一言言葉を掛けて、席を離れた。

―さっきのは冗談やから―

『…コナン君が、新一君だって知ったら…そう見たくなる……う、うちの場合やけどな。馬鹿なうちの場合。』

(…ちげえよ。和葉ちゃん…和葉ちゃんは馬鹿なんかじゃねえ。それが普通…なんだよ。きつとな…)  
静かに、コナンは微笑んでいた。

—例えば、そんな日常。

間章 例えば、そんな日常（1）（後書き）

短編をこんな感じで挟んでいきますが、結構本編に関係あるんですよー…

次回がキャンプ編というのは言うまでもないでしょう（笑）

#### 4章 迫りし魔の手(1) (前書き)

いよいよストーリーが進む…

#### 4章 迫りし魔の手(1)

「…あら。和葉さん。」

灰原が部屋に戻って寝ようとする、同じように自室に戻っていく片葉を見かける。

「『さん』付けやめてって…しかも、今は片葉なんやから。」  
「まあ、そうね。」

さらっと流して、灰原は扉を開けた。

「―お休み。哀ちゃん。」

「…ええ。お休み。」

ちょっと不機嫌そうだったのに僅かに反応する片葉だが、「お休み」と残して部屋に入って行った。

(…ごめんなさいね。和葉さん。でも、後…何日会えるか、分からないから…せめて、そのぐらいの間だけ…実名で呼ばせて頂戴。)

静かに呟いて、灰原は部屋へと入った。

—1分後。慌てて、すぐ前に閉じられた扉が開いた。

「いつけな…歯磨くの忘れてたわ……………あれっ？」

さっきまで無かった、一枚の紙切れを片葉は手にした。

「…？」

そこに書いてある数字の組を、一つ一つ読み上げていく。

「『1 - 1 / 7 - 2』と、『7 - 1 / 8 - 1』……………何やのこれ…………？」

—ピラリと片葉は裏を見た。

「『……………忘れるな。悪魔はすぐそこに……………？』」

今度は訳の分からない日本文に、頭を掻き毟る。

「ま、ええか…別にどうでも。」  
自分の寝巻きのポケットへとそれをしまつと、片葉は洗面所へと歩いていった。

~~~~~

「『キャンプ、キャンプ！またキャンプ！明日もキャンプ、明後日も！』」
恒例のキャンプノリへと走る探偵団。車内にも関わらず…運転している博士は大丈夫だろうか。

「キャンプ、キャンプ…」

少年探偵団の衝撃的なノリの高さに、必死についていく片葉。

「うつせえな…って、灰原。もう寝てやがる…」
もう慣れてるとはいえ、呆れるコナンと…この煩さの中眠る事ができる、恐るべき灰原。

「…いいよなあ…はあ。」
「—やったら、起こそっか？」

いやらしく笑う片葉の笑いにつられて、コナンも笑みを浮かべた。

「ああ。頼むぜ。」
「りょ〜かい！」

和葉は、小さく息を吸い込んだ。

「あ〜っ！哀ちゃん、蜘蛛！蜘蛛！」
「…えっ！？」

灰原が、はっと起き上がる。
慌てたように、前後、左右を見渡して行く。

片葉は声を出した。
「ちやうよ哀ちゃん！上！上！」

「上つて…きゃっ。」

すると片葉は、灰原が上を向いたタイミングで―30cm程離れた所から、灰原の顔面に冷たいペットボトルを落とした。

くすくすと、コナンが笑っている。

「…もう―江戸川君？」

「え？」

灰原が、コナンの首根っこを掴んだ。

「あなた…こんな下らない事を鳥山さんにさせて…」

「ちょ、ストップ！俺じゃねえ…俺じゃねえよ！片葉ちゃんが自分で…」

「コナン君酷い！うちのせいにしようとしてえ…」

「ちょっ…片葉ちゃ…」

（じい…）

「うっ…」

片葉がぶりっ子モードへと突入した。随分と上手なので困り物である。ひよっとするとコナンよりも上手いかもしれない、などと灰原は思う。

「さて…帰ったら実験体採用ね…」

「や、やめろって…やめっ…」

コナンは言葉に詰まる。

「…へーへー。俺が悪かったですよ…」
「…よろしい。」

灰原は上機嫌そうにコナンの頭を摩った。

（覚えてろよ…灰原め。）

「ま、ええやん。哀ちゃんに起きて欲しかったんは、本当やもん。」
片葉はにっこりと笑って、言った。

―米花町から、車で1時間程度のこのキャンプ地は、集まった時に
灰原が最終的に選択した場所だった。

『川が綺麗だし…軽い釣りぐらいならできるでしょうし、魚をそこでとって…お肉を持ってってバーベキューなんかどうかしら。ま、博士もたまには食べたいでしょうしね。』

「そうだよ。哀ちゃんが決めたんだもん…」
「…そうね。」

それでも、灰原はどこか浮かない顔だったのが、片葉には気に掛かっていた。

―魔の手は、少しずつ迫っていた。

4章 迫りし魔の手（2）

「すうっ」

―大きく、片葉は息を吸い込んだ。

—でも、この行動に関して言えばそんな事は関係ないだろう。

「「「「やつぽっ！！」」」」

「やっほっ！！」

「すげ〜っ!」

「すご〜い!ちゃんと跳ね返ってきたよ!」

「ふふっ…」

探偵団と、片葉が山彦を楽しんでいたのだった。

「ったく…」

「…山彦。」

コナンが呆れる横で、灰原がポツリと呟く。

「あ?」

「山の谷などで起こる声や音の反響。山の神が声音をまねるのだと信じられていた。木霊とも言っ。」

「誰が説明しろっつたよ…」

説明口調の灰原に再びコナンが呆れる。

「…さてと…テントも出来たし、釣りに行くとするかの。」

「よ〜し!大物釣るぞ〜!」

元太が早くも服の袖を捲り上げる。

「すぐそこなのね…その川って。」

「ああ…その小さな林の向こう。道は…こっちな。」

「うわぁ…綺麗やなぁ…」

「まあ、都会で流れてるのに比べりゃ遥かに綺麗だよな。」

川を見つけると探偵団はあっという間にはしゃぎ出して、釣り道具を背負っている博士を急かす。

片葉もコナンも、自分の荷物を川の近くに置いた。

「…あれ。」

―ただ、一人。灰原がそこから姿を…消した。

~~~~~

その少女は、息を潜めてその場に座り込んだ。

(……私の気のせい……?)

自分の勘の鋭さには、度々腹が立つ灰原だが、今回ばかりはそうも言ってられない。

(…殺気が…消えた?)

—僅かに感じた殺気。この付近に他の客は居ない…と考えれば、自分達に向けられていたと考えるのが自然だ。

気配を消して尾けて来たが、男達が入っていった洞窟の中からの会話は全く聞こえない。

(…近づく? いいえ、この位置じゃないと…)

最悪は、自分が捕まる事。

ただ、このまま黙っていても…何とかなるかは分からない。

今は、この洞窟の入り口の手前の木の陰に潜むしかない。

(…取り敢えず、工藤君には伝えておこうかしらね。)

ポケットから、灰原は探偵団バッジを取り出した。

「…工藤君。」

―返事はない。流石に声が小さいだろうか。

（…一旦離れた方がいいかしらね。）

灰原は立ち上がり、林の中へと入り込んだ。

（…この辺なら。）「工藤君！」

返事は無い。

「工藤君！？返事して！」

少し切羽詰ったように言ってみるが、コナンからの返事は来なかった。

仕方なく灰原は、通信の対象を「コナン」から「探偵団全員」に変更する。

「誰か！？居る！？」

『あ、哀ちゃん！？』

―逆に、焦ったような声が帰ってくる。片葉だ。

「和葉さん？えつと…」

『「えつと…」やない！今、何処居るん！？』

慌てたように、灰原は返事を返す。

「ちよつと、少し離れた所にね…」

―バッジから、川の流れの音が微かに聞き取れた。

「…川原に居るの？」

『う、うん…そうやけど。』

「―分かったわ。ちよつと話があるから、そっちついたら話すわ。意外とヤバイ事態だから。それじゃあね。」

灰原がバッジの電源を落とした―その瞬間。

『パシィ』

「きゃっ……」

灰原の頬が強く叩かれ、頭から地面に叩きつけられる。

「ようようお嬢ちゃん……この前は仲間をよくもやってくれたもんだ。」

気付けば、男の手元にバツジが回収されていた。

「っ……」

「お嬢ちゃんはやけに頭の回転が速くて面倒だからな……眠ってる！」

男はもう一発灰原を殴る。

鈍い音と共に、立ち上がりかけた灰原がもう一度崩れ落ちる。

「…さてと。」

男は、灰原が動かなくなった事を確認し、少女を抱え上げた。

#### 4章 迫りし魔の手(3) (前書き)

合宿帰りの久々の投稿です。変な点あれば、何なりと指摘して頂けると嬉しいです。よろしくお願いしますm(\_\_\_\_\_)m

#### 4章 迫りし魔の手(3)

「いやゝ大漁だったぜゝ！」

クーラーボックス一杯に魚を入れた元太が、嬉しそうにスキップしていた。

「さてと、今夜はバーベキューじゃな。」  
「わーい！」

―片葉はふと、時計を見る。

「…5時半。」

呟いたのを聞いて、コナンが聞き返した。

「―灰原か？」

「うん…」

バッジで通信を取ってから、3時間以上が経過した。

「そっちに向かう」と言っただけ灰原からは、未だに連絡は無い。

「…確かに、そう言っただよな？」

「うん…」

コナンはちらりと右を向く。

そして、大漁に舞い上がる3人の子供、そしてその3人と一緒にせつせと用意をする博士を視界に捉えた。

(…灰原、らしくねえけどな。)

心の中で呟くと、コナンは一人で歩き出した。

「ちよっ、コナンくー」

「ー和葉ちゃん。」

鋭く、冷たい声がコナンから放たれる。

「…え？」

「ー絶対に、誰にも連絡するな。警察にも、な。」

それだけ残し、コナンは走り出す。

「ちよ、待ち！」

片葉も、その背中を追い掛けて行った。

~~~~~

「――なんだあ？このバツジ……」
「玩具か？」

一人の痩せた男が、完全に拘束した灰原を一室に放り込み、戻ってくる。

「侮んじゃねえ。あいつが眠らされたと聞くし、油断すれば二の舞になりかねねえぞ。」

「眠らされたって…一体、どうやって？相手は餓鬼だったんでしょ？」

その男の言葉に、太り気味の男が疑問を投げかける。

「成る程…そういう事か。」
「え？」

目つきの悪いの男は、静かに口を開いた。

「子供なんか二人が遅れを取った理由さ…さつさと始末すれば良かったものを、ゆつくりと料理しようとした…それが逆に子供離れた頭脳を持つこの女の子と、もう一人の男の子によって嵌められる原因となった……」

そこまで聞いて、ようやく太り気味の男はポンと手を叩く。

「―そうだ。まあ調べておいて良かったぜ…この二人だ。」

痩せた肉体に、きつちりとフィットするようなコートの中から、二枚の薄い紙を取り出した。

「……この二人か。」

「ああ…一人はもう捕まえた小娘。恐らく、もう一人も近くに居ん

だろうな……この二人を捕まえておけば、爺さん捕獲は上手く行くさ。
取引で金を手に入れた後は、さっと仕留めりゃいい。」

痩せた男は静かに笑った。

「――任しとけよ……必ず上手く行く。恨みは晴らすぜ……くっくっ……」

4章 迫りし魔の手(4)

「灰原！灰原！」

―当たり前だが、返ってくる声はない。

灰原…アイツが道に迷うなんて事はそうそう無いだろ。何かあったに違いない。

けれど、何があったかは全く把握できない。
もしかすると…何かの事件に……？

…姿を見失ってからかなり時間は経っている…もう猶予は残されて
いないかもしれない。
―灰原を早く、見つけないと…

…ん？

「…洞窟？」

この近くに…あつたのか。そんな場所が…

…人の気配…それも、一人じゃねえ。三人以上…足跡は…中に入つてく奴が3つあるな。やっぱり三人…

…この中へ灰原自ら入って行つた？いやそれは考えられねえ…灰原が入って行つた形跡は見つからねえし…
そしたら、まさか…ここに連れ去られた…？

…とすれば流石に飛び込めねえな。中の奴らの様子を探ろうとして迂闊に見つかるわけにはいかねえし…
くそっ、でも中に灰原が居るなら……時間があるかも分からない…

灰原が何かしら、合図でも送ってくれりや…何とかなる……でも、
そもそも灰原がここに居るとは限らねえしな……
―時間が無えけど、一旦ここは後回しにするしか…

「！！」

…灰原の右足の靴！？
おいおい、まさか―

『きゃあっ！』

やっぱり…！！くそっ！

~~~~~

「哀ちゃん!？」

大声を上げながら、片葉は森の中を歩き続けていた。  
…と言っても、片葉自身も不安に襲われながら、である。

「哀ちゃん!？どこに居るん!？」（…って、コナン君もどっか行  
ってしもたし……）

—自分が迷っているという事実を何とか誤魔化すようにして、片葉  
は灰原を探し続けた。

「哀ちゃん!！」

—少しずつ夕暮れが近付いて行き、徐々に視界も暗くなる。

（どこやら…どこ…）

後ろを振り返っても、元来た道の形跡は感じられず、戻ってももうテントの場所まで自分自身が戻れる自信を完全に失っていた。

(…哀ちゃん、コナン君…！)

助けを求めながら、片葉は灰原を探し続けた。

『シャン…』

(え…？)

片葉の聴覚が、何かを感じ取った。

『シャン、シャン…』

(…鈴？これって…)

微かな鈴の音が、響き渡る。

『シャン、シャーガシャン！』

(……まさかっ！)

―何かが割れ落ちるような音が響くと同時に、その方向へと片葉は走り始めた。

（ここや…！哀ちゃん！）

森を抜けた先に、片葉は洞窟を視界に捉える。

『来ないで！』

―中から、跳ね返って届く灰原の声。もはや、疑う余地も無かった。  
「待ってて、哀ちゃん！今行くから！」

『ダメ！遠山さ―っ…』

途中で口を塞がれたのか、言葉はそこで途切れる。  
―もう、片葉の足は止められない。

（~~~~~）

（誰も居ない…？）

コナンは洞窟の中をバツジで照らすが、何人かがそこに居たという形跡しかない。

―声を上げた筈の灰原の姿が、そこには無かった。

（…もしかして。）

部屋を一度見回すと、コナンは壁を調べ始める。

（あつた…！）

超小型の再生機が、そこには置かれていた。

（そうか…灰原を襲ったときの声をこれで再生した…すると―）

素早くコナンは、上から振り下ろされる拳に反応し、飛んで避ける。

「…やっぱりな。これは俺を始末する為の…罠だったってわけだ。」

―太り気味の男は舌打ちし、頷く。

「その通りだ坊主。噂どおり、随分と頭の切れる奴だ…が。」

一度地面に唾を吐き捨てると、男は続けた。

「俺らの仲間をムシヨに送ってくれるとは…やってくれるじゃねえか。なあ？分かるだろう？お前ら少年探偵団とやらが逮捕した、二人の男を…」

（偽解体業者…！）「…ああ。」

偽解体業者による博士の誘拐事件―少年探偵団が巻き込まれた事件の一つである。

この事件の、残党が居た―コナンは理解する。

「…しかし、奴らの二の舞は踏まねえさ…どうやら今回はサッカーボールも持ってねえみてえだし、麻酔銃とやはらは…こうして全身きつちりと装備すれば、刺さらねえだろうしな。」

高笑いしながら、顔をマスクで覆った男は、ゆっくりとコナンに近付く。

「アハハッ…」

「な、何を笑って…」

ゆつくりと、コナンは笑いながら、ベルトのボタンに手を掛けた。  
「ーおじさん、残念だったね。多分、その二人から聞いた情報だろうけど…サッカーボールは大誤算だよ。ほら…ね!」

ベルトの中心部から、膨らんだサッカーボールが現れ、コナンはそれを強く蹴り出す!

『バンッ』

「ぐあっ!」

男の呻き声と共に、サッカーボールは地に落ち、その姿を失う。  
そして、男は横に倒れ、意識を失った。

（ま、嬉しい誤算だぜ。これで色々といつを調べられる……後は、場所を突き止めて人質状態の灰原さえ取り戻せば……残りは警察に任せれば良い。）

コナンはゆっくりと、男を調べ始めた。

— 思わぬ誤算が、続いているとは知らずに。

#### 4章 迫りし魔の手(5)

「哀ちゃん!？」

洞窟の中にはランプが付いた小部屋があり、奥には扉がもう一つ取り付けてある。

「まさか…哀ちゃんはあそこに!」

急いで扉に駆け寄り、こじ開けようとするが、扉は開かない。

―鍵穴はなく、内側から鍵が掛けてあるようだった。

(哀ちゃん……)『シャン…』

「え…?」

―外からも聞こえた、鈴の音。

(やっぱり…哀ちゃんはこちらに…)『シャン…』

（あれ…？）

僅かな違和感を、片葉は掴み取った。

何か分かりそうで、何故か分からない―そんな違和感。

よくよく感じるような、けれど何かが分からない、違和感。

（…音がちよつと、小さく…なった？ちやう、そういう事やなくて…何か決定的な、何か……あつ！）

頭の中で、片葉は全てを理解した。

―もはや、その先に危険な敵が潜んでいる事すら知らずに、壁に伝いに片葉は右へと進む。

（えつと、えつと……あつた！ここやつ！）

『ガタン』

（やつぱり…あのドアはカモフラージュやったんや…！）

片葉が壁の一箇所にあるボタンを押すと、擬態したドアが開き、そこを片葉は通り抜ける事が出来た。

そして、その先には、手足と口を縛られた灰原が、横たわっている。  
―小さなキーホルダー状の鈴を持ったまま。

「哀ちゃん！哀ちゃん！」

素早く片葉は駆け寄り、灰原の自由を奪う物を、全て剥がした。

「大丈夫！？どつか苦しいところ…無い？」

―だが、全てを剥がしきつた後の灰原の表情は、絶望にも似た物だった。

片葉から顔を逸らし、斜め下を向いた。

「…ど、…て…」

「え？」

しかし、灰原は鋭く片葉を睨むと、叫んだ。

「どうして助けに来たの！？あなた分かってるんでしょう！？私が何者かに襲われてるって事！分かってたんでしょ！？だったらどうして来たの！？同じ目に遭うのは『あなた』なのよ！？分かってるの！？」

―その剣幕に、思わず片葉は俯いてしまう。

「分かってない…！敵は外で、今か今かと私達が部屋から出て来るのを心待ちにしている…私達への復讐者。それが分からない！？あなたはそれすら気付かないで、一直線にこの部屋に来た―」

「―大馬鹿者ってわけだよ。お嬢ちゃん。」

痩せ気味の男が、静かに笑いながら部屋に入ってきた。

「…くっ…」

静かに男は拳銃を取り出し、片葉の方向に向ける。

—その距離、僅か5m。

「さてと…どちらから死にたい？やはり大馬鹿者のお嬢ちゃんかな？それとも俺らの仲間を散々にしてくれたお嬢ちゃんかな？…くっく、どっちでもいいぜ…？」

ゆっくりと薄笑いを浮かべながら、男は弾が入ってるのを確認し、引き金に手を掛ける。

「…私…」

「馬鹿はあんたの方やろ？」

（なっ…！）

「ああ？」

「―やから、あんたが馬鹿や言うてんの。あんたが撃ったって、当たるわけない。」

―避ける自信を満々に前面に押し出すように、片葉は一步前に出た。  
「撃ってみ。絶対当たらんから。」

「ちょっと、ふざけー」『パァン』

灰原が横から制止しようとする、灰原の足元近くに、銃弾が放たれる。

「黙れ！―どうやら、その坊やが死にたがっているらしいからな、覚悟に免じてお前だけは生かしてやるんだ…くっく、一番苦しむのはそのやり方みてえだからな。」

男は、今度こそ片葉に狙いを定める。

（…フン、分かってんだよ。右利きだ右利き。ビビッて右に避けるに―決まってる！）

『  
パ  
ア  
ン  
！  
！  
』

「なっ……」

「やから、言つたやろ？」

静かに、片葉は笑った。

「当たらん——ってな。避けるまでもない……ふふっ。」

——片葉は一步も動かない。

『ええか、和葉。よつぼどのプロやなければ……相手の体をそのまま真っ直ぐ撃ち抜くのは難しい……ビビッて外すか、そのビビりを隠すように最初から避ける方向を予測して撃つか、大体どっちかや。覚えとくと意外と便利やで？』

——そんな機会、ろくにない——そう平次に突っ込んだ和葉だったが、片葉になってから思わずその言葉に礼が出た。

「……この、糞餓鬼があああ！」

男が襲い掛かろうとすると、今度こそ片葉は本領を発揮する。

素早く避けると、殴りかかってきた右腕の勢いそのままに、男を一回転させて、地面に叩きつける。

自分の体の勢いで、頭から叩きつけられた男は、頭を抱えて悶絶していた。

「ぐあっ……ぐっ……」

「今や、哀ちゃん！逃げ——きゃっ！」

だが、そう片葉が叫ぶと同時に、逆に片葉が目つきの悪い男に体を持ち上げられる。

「ふう…全く。面倒な事になったもんだぜ。」  
「は、放して！やめてや！」

何とか力を入れようとするが、片葉の合気道は、蘭のように相手を倒す事に別段特化してるわけでもなく、ましてや今は幼児化して、大きく総筋力は落ちている。  
どうやっても、抜け出せない。

「やめて！これ以上―」

そう叫ぼうとする灰原だが、背後から掴まれる。

「フン…やってくれんじゃねえか。」

男は頭をまだ痛そうにしながら、灰原の首根っこを掴む。

―江戸川コナンは、救世主まだ居ない。

#### 4章 迫りし魔の手(6)

『どうする？拘束するか？』

『いや、面倒だし良いだろう。どうせ後で殺すんだからな……それに、人質が喚いてたってどうにもならねえよ。鍵だけ閉めとけ……さてと、アイツの様子を見に行こうぜ。まあ、やられてはいないだろうが……サッカーボールを持ち歩いてたとしたら、万が一がありえっからな。』

—そんな会話の直後、ドアは閉められた。

(…どうしよう。)

男達が出て行くと、片葉は部屋中を歩き始める。

(何か、良い手でも……何か、あたしに出来る事……)

自分自身の知恵を、何とか絞って考え続ける。

「――無駄よ。」

灰原が、うずくまりながら呟く。

「……もう、どうしようもないわ。私達がどんなに足掻いても……後は工藤君に頼るしかない。もし工藤君が来なかったら、それでお終い。人質と金の交換とか言いつつ、結局私達は殺され、彼らには逃げられる……分かるでしょ？ どうやってもこの空間からは抜け出せないし、どう抜け出したって、また捕まるだけ。私達はじっとしてればいいの……それが最――」

「善策なわけない!!」

思わず、灰原が息を止める。

「……え？」

「『じつとしてればいい』？ 惚けるのもええ加減にしい！ わかんないやろ！？ ここから逃げ出す方法無いなんて、勝手に決め付けて――そんなのわかんないやろ!？」

「け、けれど――」

「――けれどやない!」

一呼吸、片葉を置くと、少し落ち着いた口調で続けた。

「哀ちゃん……哀ちゃんって、どうしてそんなにいつも下向いてるん？」

「……」

「――哀ちゃんやって、『死にたい』なんて思っただけでいいやろ？ただ、単純に……優しすぎるから。自分が死ぬ事より、周りが死ぬ事の方が嫌……そやる？」

「……ええ。」

片葉は、灰原の横に座った。

「……うちも、そうやった……うん、今もそうなんやな――哀ちゃんは居なかったから知らんと思うけどな。平次が死にそうになって――助けようとして、何とか自分犠牲にして、助けようとしたら……」

『無理矢理引っ張り上げて助けられた。』という文章が、灰原の頭の中にずっと入っていく。

「……多分、皆そうなんやと思う。自分が死ぬより、周りが死ぬ方が嫌やって……けれど、それって皆も同じやろ？それで自分が犠牲になったら『自分が死ぬより、周りが死ぬ方が嫌』な皆が、哀しむやろ？」

「……」

「――死んでも良いなんて、思ったらアカンって。絶対。」  
片葉は、静かに笑顔を浮かべて、立ち上がった。

「……ごめんな。うちも考えないで飛び込んで……あの鈴、あいつ

らが鳴らしてたんやろ？」

「え、ええ…多分。私じゃないわ。」

「ははっ…馬鹿やな。うちって……」

自虐的に笑いながらも、片葉は前を向く。

「―でも、見つけよ。何とか抜け出す方法…コナン君待つのもええけど、それしてからや。うちにやって、出来る事ある……」

「…ええ、そうね。」

灰原の顔が、静かに晴れた。

「…あれ？」

―ふと上を見上げた片葉が、何かに気付く。

「…なんやろ。」

「―小穴？」

片葉は部屋中を見回していく。

「…もしかして、あそこ——っから登れるんとちゃうっ。」

「…登ってどうするの？」

「―戻ってきたらびっくりするやろ？『居ない』って騒いで…あそこやったら見つからんと思うし…行ってみても面白いと思うんやけど…」

「何もしないよりマシかもね……でも、登れるかしら。」

「大丈夫やって…こんぐらいなら。ほらほら、行った行った！」

「わ、ちょ、ちょっと…」

「早く早く！」

「も、もう……」

「あ、今の哀ちゃん可愛い。」

「っ……」

「ふふっ……」

頬を赤らめる少女と、にっこりと笑った少女が、二人密かに行動を続けていた…

#### 4章 迫りし魔の手(7)

「くそつ。何処にも居ねえじゃねえかよ！」

―明らかな異変だった。囷に使った洞窟にはもう誰も居なかったのである。

灰原から無理矢理聞き出した情報として、複数人で来た事を伝えた。そして、この付近を捜したとすれば―もう一方の洞窟に来る可能性も高い。そうならば、そこで潰した方が可能性が高い…と踏んで、囷に一人を用意していたのである。

だが、その男すら居ない。倒されたのならば、どこかに括り付けてあるかもしれないのだが。

「…急くな。もう敵の術中に落ちたのかもしれない。餓鬼とはいえ、本当に侮れねえからな。ただ、こっちは人質も居る…慌てる事は無い。警察が殴り込んできやがったら、『あの場所』からトンズラすればいい。それだけだ…奴を見捨てても、何とか逃げ切れば良い。そして一人の人質と奴を交換。もう一人と金銭。これでムシヨの奴らを解放。それで良い。」

冷静に痩せた男は言ったが、その表情には思いのほか、余裕は薄れてきていた。

「…嫌な予感がするな。」

「え？」

男二人はゆつくりと中へ入っていき、洞窟の奥の小部屋の、更に奥に繋がるドアに、鍵を差し込む。

(…?)

ふとした違和感が、目つきの悪い男の頭の中を過ぎつた。

「…鍵が、掛かって…ねえ！」

「な、何だと！？確かに前が鍵を閉め…まさかつ！」

ドアを素早く開けると、二人は中に飛び入る。

「…逃げられた…だと!？」

「―慌てるな。部屋には奴らの逃げ出した痕跡は無い…とすれば…」

壁についた抉られたような痕を確認して、痩せた男は静かに笑う。

「『あの場所』に気付いた糞餓鬼二人が、ここを登って―自ら追い詰められに来た。そして、もう一人の男の餓鬼がこのドアの鍵を針穴かなんかで開いたが、結局誰も居なくなっていた…それだけさ。お前は入り口からもう一人の餓鬼が入ってくるかもしれないねえから、一応部屋で注意しとけ。」

「あ、ああ…」

すると、痩せた男は手慣れたように、壁を登り始めた。

徐々に迫る気配に、片葉が震え始める。

—ここへと逃げた後悔が頭を通って行き、徐々に胸が締め付けられる。

（哀ちゃんっ…ごめん。うちが…）

（…大丈夫。）

それでも冷静に、灰原は言い放った。

（…彼の策略ね。全く、ここに気付いていないフリなんかして…）  
（え？）

（まさか、この上にまで気付くとは…な。やっぱり、小穴が見つかったか？まあいい。ここを出るのは不可能…）

『おい！全員居るじゃねえか！』

（なっ—！？）

外に出た男の声がして、一気に痩せた男は3m程の高さから飛び降りる。

「全員居るだ—なっ—！？」

―部屋から飛び出た男。

―意識を失い横たわる男。

―柔らかいスマイルをこちらに向ける少年。

「おじさん。残念、だ、った、ねっ！」

ベルトの中央部から放出される球体が、強く蹴り出され、男に避ける時間を与えず直撃した。

くくくくくくくくくく

「おゝい。もう降りてきて大丈夫だぜ。」

コナンの合図で、二人はほっと胸を撫で下ろし、壁を降りて行く。

「こ、コナン君……ごめー」

「いや、俺が悪かったよ。片葉ちゃん置いて、行った俺が……な。探偵団と同格に扱うような、そんな態度になってたから……本当、ごめん。」

片葉の言葉を遮って、コナンは謝罪した。

「……うつん、うちこそ。本当にごめん。」

少し俯きながらも、ちよつと笑顔を浮かべた片葉も謝った。

―警察によつて、二人と、伸縮サスペンダーで別の所へと移動されていた男は捕まり、事件は収束を向かえる。

その晩、コナンは灰原に聞いた。

「―灰原。」

「え？」

灰原が曖昧に問い返す。

「…お前さ、何かあつたのか？」

「……」

コナンもまた、曖昧に問を投げかけるが、今度は灰原は何も返さなかった。

「…そうか。」

ゆっくりと、コナンは眠りにつく。

『抱え込むなよ。』

―言われてもいないコナンの言葉が、灰原の頭の中に響いた。

#### 4章 迫りし魔の手(7) (後書き)

色々謎は持ちこしです(笑)

4章終了しましたっ！評価、感想よろしくお願いしますm  
m  
(――)

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(0)

夜が怖い。眠りたくない。

…眠れば、悪魔達がまた踊り出す。  
私を揺さぶる…悪魔達。

—どうして、こんな夢ばかり見るの？  
—どうして、今更こんな夢を見るの？

—どうして、お姉ちゃんを「工藤新一」が見殺しにした…そんな真実を伝えるような、夢を見るの？  
毎日、毎日…違う登場人物が違うシナリオを描いて、そして…全部同じ真実を伝えようとするの？

片葉さんが…それこそ、ここに来てから、ずっと……

…昨晚なんか、もはや傑作よ。

『…ごめん。灰原。言えなかった事が…あるんだ。』  
『え？』

『…俺なんだよ。お前の姉さんを見殺しにしたのは…助けられたのに、姉さんを囚にして、組織の動向を掴もうとしてたんだ。』

…信じられないような、事。彼がそんな事するはずない。  
—けれどっ……

…嘘よね？工藤君。  
嘘なの…よね？

あなたのその静かな寝息を立てる横顔を…信じて良いのよね？  
『—悪い。灰原。もう、お前とは一緒に…居られねえよ。』

…私はそう信じたいけれど。  
それ以上に、今晩は誰が出て来るか分からなくて、怖い。

でも、寝るしかない。悪夢だとしても…私は。  
—逃げたって、いつかは…睡魔に捕まるから。

『哀ちゃん？』

『えっ…』

彼女は笑いながら、ゆつくりと私に近付く。

『哀ちゃん。ちょっと良いかな？』

『っ…！！』

足が…動かない！

『―捕まえた。』

きゃっ…

ら、蘭さん…くっ…

『ねえ、知ってた？哀ちゃんのお姉さんって―』

――新――に殺されたのよ。

「『あああああああああああつ！！！！』」

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(1) (前書き)

赤ちゃん中心で展開されるこの章。それでも、大きく絡むのは片葉ちゃんなんです。

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(1)

「大丈夫？哀ちゃん…」

「気分悪くなったら、言うんやで？」

「…え、え……」

―高熱の少女を、後部座席の後ろのスペースに寝かせた状態で、車は発進した。

心配そうに歩美と片葉が声を掛ける。

「博士。今は何度ぐらいだ？」

「―37度8分。まあ少し下がって来とるし、家に帰ってぐっすり寝かせれば二、三日で良くなるじやろう…」

「…だと良いけどな。」

と言って、コナンは大きく欠伸する。

―気付けば、光彦と元太は眠りに堕ちていた。昨晚、1時頃に灰原の叫び声で目覚めてしまったのだ。

それから、39度近い高熱の灰原を交代で看病していた為、全員が眠気に襲われていた。

「まあ、皆眠いじやろ…少し寝ると良い。」

朝食を食べて、博士が仮眠を取ってる間に荷物を整理し、こうして博士の運転で帰宅している。

「……特に、哀君はの。」  
「……」

灰原の頭の中を、ここ数日の散々な夢が駆け抜けて行く。  
コナンが現れ、そしてキャンプ地では蘭が現れた。

（寝れる、わけ……ないじゃ、ない……）  
眠れば、次は誰が夢に現れるだろう？

日に日に増す苦痛に、これ以上耐えられるだろうか。いや、もう既に限界を突破しかけている。もう耐えられない。

―コナンが『最後の悪夢』だと灰原は心の中で密かに信じていた。  
だから、昨晚に現れた悪魔が、更に大きな苦痛を引き込んだ。

（…また、悪魔に…狙われて…）  
また現れる悪魔が、同じ事を告げるのは確かだろうから。

意識がそれでも、睡魔に敗れて遠のいていく。  
（ダメっ、だ……め……）

― 極限状態に達した睡眠欲には勝ちようが無く、灰原はそのまま静かに眠りへと沈んだ。

~~~~~

『志保…』

え…？

「志保…！志保！」

えっ…？

ここ、何—っ！！

「お、お姉ちゃん！？」

う、嘘！？

「良かったっ！良かった、良かったっ！」

…これって、夢…？

—お願い、覚めないで。いいえ、真実で…現実であって…！

「も、もう…そんなに、強く抱き締めないで…ちょっと、苦しいわ

…」

「ご、ごめん…はしやぎすぎちゃって…」

…夢？

違う。こんな会話ができる夢なんて…夢じゃ…

「…でも、良かったわ。また会えたんだもの。」

…？待って。どうして私が元に…戻ってるの？

え…っ！！

「お姉ちゃん！くっ…！！」

どうして！？どうして私の体が動かないのっ！？

早く…お姉ちゃんを助けてよ！！

「やめてっ！！ジン！やめてっ！！」

「……え？」

「避けてっ！お姉ちゃー」

『
パ
ア
ン
』

「え…？」
…え？

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」
大丈夫…！まだ生きてる！
早く、助けないーと…

「お姉ちゃ…！」
え、江戸川君っ！？
どうして…いいえ、どうして！？

「江戸川君！江戸川君！」
…声が、届いてない！？
いいえ、それより…

—どうして江戸川君は『救急車を呼ばうとしないの！？』
どうして…っ…どうして…っ…？

届いてよ……！この声！いいえ、それ以前に……早く呼びなさいよ！救急車を！

「発信機を……雅美さんの車につけておいたんだ。雅美さんが事件の黒幕に会いに行くに違いないと思ってね……クソッ、あの時ちゃんと話しておけば……！」

違う！今は早く……早く……！

「き、君は……一体……？」

「江戸川……いや、工藤新一……探偵さ……」

何名乗ってんのよ！？あんたのすべき事は……

「工藤……新一……？あなたが……そう……噂は聞いてるわ……私が雇った二人が殺され、結局私も……組織の手にかかって……」

「……組織？」

「謎に包まれた大きな組織よ……末端の私に分かるのは……組織のカラーがブラックって事だけ……」

「ブラック……？」

どうでもいい！そんな事は……後で私が幾らでも言える！早く……早く救急車を呼んで！

「そう……組織の奴らが好んで着るの……カラスのような黒い服をね……」

「……！」

「さ、最後に私の言う事……聞いてくれる？……これを、……こっちが本物……奴らが持ってたのは偽物よ……米花駅、東口のコインロッカー……ガハッ……お願い……奴らが気付く前に……もう利用されるのは御免だから……頼んだわよ、小さな探偵、さ、ん……」

…え？

「お、お姉ちゃ…ん？」

おき、て…

オキテ…？

オキナイノ…？

オキテクレナイノ…？

ネチャツタノ…？

コンナソウコノナカデ…？

「…っ！」

「警部…」

メグレケイ、ブ…？

「…おい。これは…」

「―何者かに射殺された…のでしょうかね。」

「多分な…」

ジン、ヨ…

「…しかし、恐らく犯人はみつからんだろう。相当な周到な計画の殺人だろう…取り敢えず、一応非常線を張っておけ！」

「はっ！」

ミ・ツ・カ・ラ・ナ・イ？

…アレ、コナンくんハ？
ドコニイッテ…

モウ、イナイノ？

—シカタナイ…オコサナイト。ワタシガ。

「オネエ、チャン…」

「オネエ、チャン…」

才キテヨ。

オキテヨ。

オキテヨ。

オキテヨオオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!

~~~~~

「―あつ！」

目覚めた灰原の視界に、映ったのは―

「…哀君。大丈夫かね？」

「は、博士…？」

ゆつくりと灰原は起き上がる。

「あ、哀君。無理しちゃいかん…そこに座ってなさい。」

「いいえ、大丈夫だけど…それより、ここ…」

見回すと、自分の部屋だという事がすぐに理解出来た。  
――全ては、夢だったのだ。

「しかし、大丈夫か？突然熱が上がったと思ったら、叫んで、起き上がって…悪い夢でも見てるのかの？」

「え…いいえ。違うわ。単純に…ちょっと苦しくなったから。」  
「しかし…」

「――心配しないで。」

灰原はベットから抜け出して、大きく伸びをする。

「これ、哀君！まだ熱が…」

「――大丈夫よ。私、用事あるから…」

「あ、哀君！」

そういい残し、博士を置いて部屋を出て、地下へと灰原は向かった。

「……ふふつ。」

微笑して、部屋に入り、ゆっくりと戸棚を開く。

「……ふふつ。」

もう一度微笑して、たった一つの――姉の姿を奥から取り出した。  
死んだ姉の事を思い出したくないという思いで隠してきていたそれを見て、自らを痛めつけようとしたのだ。

「……どうして。どうして……工藤君は。」

――灰原から見て、コナンと姉の会話は、数十分の時の流れを感じさせていた。

それが、ますますコナンに責任を脳内で押し付けようとする原因となりかけている。

「……助けて、くれなかった……」

―自身を、長い間守ってきてくれた、たった一人の家族。  
―自身を、一番可愛がってくれた、かけがえのない人。  
―自身が、最も愛していた…大切な人。

「どうして、工藤君が…？」  
悪魔は、全てを引き裂いた…

## 5章 皆まとめで消えてしまえば良いのに(2)

『哀ちゃん、夕飯出来たよ?』

「そう…」

『…食べんと、体に悪いで?』

「…かもね。」

『…お腹空いたらおいで、な?』

「ええ。」

淡々と受け答えしながら、灰原はパソコンを操作し続けていた。

—あの事件の真実を知る事。その真実だけを求めて、灰原は動き続けていた。

(…分かってる?)

「厄介な事件」として、この事件は警察側での調査もさほど行われず、未だに指名手配もされていない。

—正確には、「何も分からないからどうする事も出来ない」訳だが。

(…組織内に、警察側の有力な地位の人間が存在する……上層部の圧力で、この事件は単純な拳銃による強盗殺人犯の殺人として扱われてしまった。)

ようやく、一つのページに灰原がたどり着く。

「…これ、ね。」

報道規制を掛けられる前のインターネット上の夕刊の一面が、その事件を簡略して伝えていた。

(…警察の発見時、既にお姉ちゃんは死んでいた…工藤君は?工藤

君が発見したのは……)

第一発見者の発見時刻との開きまでも、その紙面に載っていた。

(…死亡推定時刻の…10分前の発見、か。悪夢よね…こんなの。  
10分―流石にどのような手を取っても、姉は救われなかった。)

哀しさと共に、僅かな安心感に灰原は包まれた。

―この事件は単純に組織の奴らによってもたらされた惨劇であり、  
工藤新一には全く責任は無い。

(…なんで、私が彼の事を…)

―ふと頭に思い浮かんだ新一の姿を、すぐに灰原は掻き消した。

『―死んでも良いなんて、思ったらアカンって。絶対。』

―と同時に思い浮かぶ彼女の言葉。

(はい、はい…ってね。)

静かに笑うと、灰原は夕食を食べる為にパソコンの電源を切って部屋を出た。

―頭の中のモヤが綺麗に晴れて、ようやく落ち着いて寝られそうな気がした。

―何が起こるかも、知らないままに。眠る事ができる気がした。

~~~~~

「あー、疲れたあ…片葉ちゃん、凄すぎるよお…」
へとへとになって、途中で木陰で休んでいるのは歩美……だが。

「元太君、重…重い…です…」
もう木陰にすら動く気力が無いのか、気持ち良さそうな陽射しの中で壁によっかかり倒れている光彦、そしてその上から乗り潰している元太。

「…お疲れ。」

それだけ呟いた、サボリの灰原。

毎年、帝丹小学校では年度末に校内マラソン大会なる物が開かれるという事で、その練習としてこの時期の体育の授業は全てそれにてられていた。

…今日は元太が小林先生の怒りを相当に買ってしまった為、随分と不機嫌な状態である。

そして、小学1年生には無謀な3km走Ⅱグラウンド15周のノルマが課されてしまったのだ。

だが、今走ってるのは二人だけである。

―万能超人江戸川コナンと、基礎体力に優れる鳥山片葉。年齢詐称二人が余裕な雰囲気を出しながら競って走っていた。他はほとんど5周程度…というか、それが普通の小学1年生の体力なのだろう。

「なあ、コナン君。」

「え？」

走っている最中に、片葉がコナンに声を掛ける。

「何で皆走ってないんやろ…」

「さあ…疲れたんだろ？」

「—そうなんかな？普通こんなで疲れる？」

「さあ…」

…暢気な会話を繰り返していた。

「ほら、皆さん…江戸川君と鳥山さんを見習って…とは言わないけど、頑張りましょう！と、く、に…元太君！あなたはね！」

「は、はい…」

小林は元太を立ち上がらせて、残りの周回をやらせ始めると、それに着いて行くように休んでた全員が走り出した。

—二人のサボリを残して。

(……東尾さん……？)

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(3)

「まったく…もう走りたくねえぜ…」

「元太君、君が小林先生のお弁当を摘み食いするからいけないんでしょう!？」

「だってよお…給食じゃ足りなかったし…」

元太らしい意見にコナンと片葉は苦笑しながら横を抜き去って行く。

「…早えな…二人とも。」

「そうですねえ…何故か呼吸もぴったりですし。」

少し恨めしそうに光彦が言うと、元太が冷やかした。

「オメー、片葉ちゃんに気があるのかよ？」

「な、なわけないでしょう!？」

じーっと横から歩美も見つめてきて、光彦は慌ててスピードを上げた。

―数十メートル前方、11週目の二人。

「ちょ、ちよつと早くない?片葉ちゃん?」

「―コナン君。こんなんでバテてたら、蘭ちゃんに置いてかれる、でっ!と!」

片葉がコナンの尻を叩くと、痛烈な響きから推測出来るほどの威力に思わず呻き声を上げてコナンは加速する。

―追いかけるように、片葉も走った。

「ほら、ファイトファイト！」

(てか、これと蘭に何の関係があるんだよ……) 「あ、ああ……」

しかし、誰も気付きはしない。

―走ってないのは、風邪で見学してる灰原だけじゃないという事に。

~~~~~

(…?)

―不審な程、まるで音を立てずに立ち去ったマリアを追って、灰原

は校舎裏に辿り着いた。

(…東尾さんが、居ない?)

だが、何処を探し回っても彼女の姿は無く、聞こえるのは校舎の3階の音楽室のリコーダーと、生徒の騒ぎ声だけである。

「まさか…瞬間移動したわけでもあるまいし。」

死角から逃げ出したのだらうと決め、戻ろうとする。

「哀ちゃん?」

(—っ!?) 「え…?」

すぐ後ろに、探していた少女は存在した。

「どないしたん?こんな所まで来て…」

「—あなたこそ、どうしてここに?」

マリアは笑顔をキープするが、揺れ始めたのは灰原だった。

(…何よ。この胸騒ぎ…)

思わず、一歩後ずさりする。

(…違う、組織の物じゃない。)…「そもそも、私は東尾さんを追いかけてきたんだけど…どこにも居なくて。そして帰ろうとした途端に、まるで瞬間移動してきたかのようにあなたが現れたのよ。」

—少しきつめの口調で、灰原がマリアに言った。

「まさか…うちがそんな事できるわけないやん。」

ニコニコと笑って、マリアはさっさと灰原の横を通り過ぎて行った。

(…どういう事?)

思わず灰原が震える。

(―何で、まるで彼女の『気配すら感じない』の?)

足音を立てないように歩いてるだけならまだしも―そこに居るはずの彼女の気配はまるで感じない。

灰原の頭の中を、一つの思考が駆け巡る。

(…正体すら隠して、彼女は一体…何者なの?)

「哀ちゃん?」

(日々の彼女の姿…どちらかというとな大人しい彼女の姿は、全く感じられない…一体、一体…)

「哀ちゃん?」

「え、え?」

―灰原の顔がマリアの方向に向くと、マリアはスマイルを向けて言った。

「早く戻らんと…小林先生、怒るんとちゃう?」

「そ、そうね…それじゃあ、戻りましょうか。」(元に…戻った?)

「うん、そうしょ。」

マリアは灰原と手を繋ごうとするが、それを灰原が拒むと、少し寂しそうな顔をして、灰原と一緒に戻っていった。

―足音が聞こえてくる事に違和感を感じながら…

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(4)

『灰原、大丈夫か?』

『え?』

『顔色、少し悪いように見えつけど…何なら、家まで着いてくぜ?』

『…大丈夫よ。全然昨日よりマシだし…ちょっと、元気が無いだけ。今日は早めに寝るわ。』

『そ、そうか…』

『おいコナン君!哀ちゃん、一緒に帰ろ!』

『あ、分かった!歩美ちゃん!—灰原、帰るか。』

『え、ええ…そうね。』

私はその時、チラリと彼女の顔を窺った。

—至って平常的な彼女の姿。

帰りの用意をして、いつものように帰ろうとしている。

…帰り道は正反対。彼女の家は…確か、米花駅前付近にしては珍しい、綺麗な庭のある一軒屋…

『ごめん、工藤君。私、今日用事あるから…』  
『え…おい！灰原！』

上手く行く事を信じて…ね。

―東尾さんに気付かれさえしなければ…

あの超能力者<sup>化物</sup>に喰われなければ。

~~~~~

「じゃねっ、マリアちゃん。」
「うん、またな。」

仲良くなった女の子―南彩夏と別れると、彼女は駅前の通りをゆつくりと歩いていく。

（結構、歩くのよね。）

学校から案外距離があり、駅の方面ではクラス内でも最も遠いのだとか。

―本人曰く、20分は掛かるらしい。

（この距離…人ごみの中キープするの、結構厳しいのよねえ……まあ、組織時代の失敗したら殺される状況よりはマシだけど。）

―それでも、この女がスパイか、何かしらその類の存在である可能性を否定できない事が、灰原の足を止めはしなかった。

余りにも危険すぎると分かっているながらも、灰原は動き続けた。

―マリアは駅前のロータリーに出ると、小さな路地へと入って行く。

（ここって…確か、地下に繋がって、駅の反対側へ出る道よね…？）

路地の人通りの少なさを見て、灰原は駅の中を通り抜けて、反対側へと抜け出した。

（…居た！）

案の定マリアは反対側へと出てきて、そして右へと曲がっていった。

（……人通り少ないわね…）

灰原は物陰に隠れて、マリアが曲がったタイミングでその後を尾けて行く。

そして、一つの家の前でマリアは立ち止まった。

(…ここ…、ね。)

マリアは呼び鈴は鳴らさずに、外門を開き、中のドアを鍵で開けて入り、鍵を閉めた。

―灰原はそれを確認して、その家の前へと立つ。

(…両親が共働きのかしら？昼間どちらもない…？)

庭は綺麗に手入れされており、面積は結構な物だった。

車が一台、そして犬小屋が端の方に取り付けられている。

(……至って普通。)

ふと灰原は右のポケットに仕舞ってあった盗聴器を思い出し、外の門の端の方に、ガムに包んで一つ取り付ける。

(…もう一個。出来れば中が良いけど……)

とはいえ、マリアに頼んで開けてもらうしか、現状は方法が無い―
と思われた。その時である。

「哀ちゃん、どないしたん？」

――片葉の関西弁じゃない事を認識した灰原の頭脳が、一瞬で崩壊した。

「ひ、東尾さんっ!？」

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(5)

―灰原がマリアの家に向かう2時間前、本庁―

「え？鈴を鳴らしてたのはあいつらじゃなかったんですか？」

佐藤は横に首を振った。

「違ったのよ。あの女の子…そう、片葉ちゃんを誘い込む為だと思
つてただけど、鈴については『何も知らないし、聞いた覚えはあ
るが鳴らしてはいない』って言うてたわ…確かに、その鈴はあの部
屋中を探しても見つからなかったし、犯人が持ってたから、
鳴らしてないってのは本当だと思うけど…」

「で、でも…」

「『鈴の音を鳴らした奴らの仲間が逃走してるかもしれない』…そ
う言いたいんだろうけど、それも無いわーっと、白鳥警部。どうで
した？」

取調べ室から出て来た白鳥は、肩を竦めて言った。

「昨日と大体状況は変わりはないんですが…犯人のグループは、
この5人で確定という事にして構わないでしょう―まあ、後程確認
を…さてと、私はちよつと久々に睡眠をとらせて頂きますから。」

「ここ二日間、働きづめだったものね…ご苦労様。」

佐藤に軽く礼をすると、白鳥は歩き去って行った。

「…それじゃあ。」

「ええ、逃走してる犯人は居ないと思って大丈夫な筈よ…と言って
も、その鈴が奇妙な事には変わりないんだけどね。」

―別の目的があったのか。その可能性を頭の中に佐藤は張り巡らせる。

（誰かが…あそこに片葉ちゃんを誘い込む事で、何かしらの情報を得たのかしら…だとすれば、少し彼女の周辺を探ってみた方が良いかも…いくらなんでも奇妙だわ。）

嫌な予感が頭を駆け抜けて行きながらも、佐藤と高木は昼食を取りに食堂へと向かった。

~~~~~

「うちの前立って…どないしたん？」

真っ黒に染まった何かが、灰原の頭を過ぎっていく。

―最近良く見せる彼女の可愛い笑顔が、ますます不安を掻き立

てる。

出来れば今すぐに適当に言い訳をつけて、この場を立ち去りたいのに足は金縛りにあったように動こうとはしない。

そして、またしても…

（気配がしなかった…）「ちょっと、用事があつて…ね。」

「そやったん？…まあ、ちょっと待ってて…お母ちゃんおらへんけど、上がつてえな。」

外門を普通に開くと、彼女は『ドアの鍵を開けた』。

（えっ…！？）

—この瞬間灰原は確信する。

（彼女はドアを鍵で開けて中に入っていく、私が居る事を中から外門に取り付けられたカメラが何かしらで把握し、気配を消して、塀に登り、背後から声を掛けた…これしかないわ。）

「哀ちゃん、ええよ。上がつて。」

マリアの声を聞き、灰原は中へと入っていく。

（随分と綺麗ね…）

両親が綺麗好きなのか、丁寧に整頓された各部屋。

「今はうちとお母さんの二人暮らし。お父さんは単身赴任。」

「そ、そう…」（すると…個室は二階かしら。）

二階建てのようで、階段が取り付けられている。

「そうそう、で哀ちゃんお母ちゃんに何か用あるん？」

「え、ええ…まあね。」

「…でも、お母ちゃん帰ってくるのは結構後やし…そや、哀ちゃん。占いたげる。」

「えっ…」

「大丈夫、大丈夫。手握るだけやから…ダメ？」

「え、ええ…構わないけど。」

灰原は右手を差し出した。

「ほな、行くよ……………すう…」

灰原の右手が、マリアの両方の掌によって包み込まれる。

（暖かい…）

思わずその心地良さに、うとうとし始めてしまう程、灰原には心地良く感じられた。

体中にその暖かさが巡り、全身から徐々に力が抜けて行く。

「……」

黙ったまま、マリアは両手を離す。

「……どうだった？」

「……」

灰原の問に答えず、マリアは灰原を手招きした。

「……来る。」

「え？」

『おお、帰ったんか。マリアー』

（隠れて！哀ちゃんっ！）

（えっ……！？）

マリアは、壁へと灰原を押しやった。

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(6)

「お帰り〜マリア…っと。」

「―何や。えらい早いないか、母ちゃん。」

無愛想に答えるマリア。

「どうしたん…随分と不機嫌やなあ。」

「別に？気のせいとちゃう？」

しかし、その母親は不敵に笑みを浮かべる。

「何や…演技か。」

(っ！)

「―昔から得意やからなあ…マリアは。そう、隠し事する時はいつも…」

―そして、その女性が睨んだ先にいる少女が震え上がる。

「…そこやな。マリアあかんで？間違っても人を家に入れ、入れ…」  
だが、様子がおかしい。

「ちゃ…………ぐっ…」

ボタン…

「え…？」

「もう出てきてええよ。哀ちゃん。」

灰原が隠れ場所を抜け出すと、すぐそこにその女性が倒れている。

「マリアはスタンガンの電源を落とし、その女性のポケットへと突っ込んだ。」

「全く…相変わらず悪趣味な女や。何するかと思うたら小型スタンガン…眠らせて弄り倒すわけやあるまいし…」

「ちよつと、どういう…事？」

「え？」

疑問の眼差しを、灰原がマリアに向けた。

「どうして彼女は倒れている…いいえ、どうやってあなたが彼女を倒したの？」

「あー…そゆ事な。」

軽く腕組みをして、マリアは座り込む。

「―単純に、睨みつけた。隙を見て手からスタンガンを奪い取って、気絶させた。それだけや。」

「それだけって…っ！」

―ふと灰原は気付く。その穏やかな表情の右目に、僅かに赤みが残る事に。

一息吐くと、マリアは落ち込んだように呟いた。

「この女。執拗にあんたを探してるんよ。」

「……」

「―ラッキーやった…もしあんたが出て来てたら、正体バレてたやろ？これで幾らでも誤魔化しようがある…」

「ちよつと、待って…私を探している？」

「ああ…そや。ま、あんたが気にする事やないけどな…さ、早く帰った方がええよ。多分、奴が次に来るやろ…」

「え…」

「―裏門。哀ちゃんが隠れたところを押せば、そこから通り抜けられる…ほら、早く行き。バレたら死ぬで？」

―聞きたい事が山ほどある灰原は躊躇ったが、一つだけ聞いて立ち去る事にした。

「ねえ…東尾さん。」

「ん？」

「―あなた、何者？」

~~~~~

「おお、哀君お帰り……」

「ただいま、博士。悪いけど……ちよつと寝かせてもらっわ。」

「――分かった。夕食の時に呼びに行けば良いかの？」

「ええ……それで良いわ。それじゃ。」

――彼女の言葉は断片的にしかもう覚えてない。

『――作り変えられたんや。全て……普通の人間やった。ちよつとすぐろくが好きな、関西の幼稚園生やった。』

『……全部壊された。お父ちゃんが死んでから。』

『一度は殺されかけたんよ。散々にお母ちゃんに振り回されて、疲れ果てたお父ちゃんが、うちの首を絞めてきて……』

『それで死ねれば、どれだけ楽やった事か。気持ち良く逝けた事か……大好きやったお父ちゃんやったら、一呼吸も無く死ねた。』

『やけど、次目が覚めた時、お父ちゃんはずちの握ってたナイフで

刺された死んでもうてた。』

『—お母ちゃんに二日前に、「何時でも持つとき」と持たされたナイフで。そう、こうなる事を見越して…お父ちゃんを超えた力で、うちがお父ちゃんを刺し殺す事を見越して。』

『うちが「迷う」と分かってたんや。お父ちゃんに殺される事に反発する心…葛藤を生んで、必ず迷いが生じる。そう見越していた…そして、案の定うちは迷い、お父ちゃんをさしてもうた。』

『「全てを隠しといたげるから…従うんやで？」—もはや死ねなくなつたうちは、自分の存在価値を別の所に見出した…そう、……にな。』

—思い出せない。霞がかって。

『—シエリー。あんたに一つ言うとかわ…』

それでも私の正体を知っていたその少女の、最後の一言だけは絶対に忘れない。

『—必ず究極の二択を迫られる瞬間が来る、迷わず歩めば、犠牲を伴いながら幸せは手に入る…選ばないのが一番いけない。逃げ出さず、飛び込まんと…あんたは死ぬ以上の永遠の苦痛を味わう……』

あなたはそう言った。

—教えてくれても良いのに。究極の二択。何よそれ？

私が絶望に染まるような…答を出せないような、そんな二択？

『さあ、もうそろそろ奴が来る…ほら、そこから帰り。』

聞く前に、私は外へと出された。

―元戻る道が、徐々に消えて行くようで…恐怖心を煽られた。

最後の悪夢は、その晩だった。

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(7) (前書き)

次回が長い。今回は短め。

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(7)

「は、灰原が高熱出して魘されてる？」

片葉の衝撃的な一言で、探偵団は朝から震撼していた。

「それ、本当ですか!？」

「哀ちゃん…大丈夫かな。」

元太、机をバンと叩いて立ち上がる。

「ようし…今日、見舞いに行つて―」

「―待てよ。片葉ちゃん、その熱って何度？」

「確か…39.5言つてたと思うけど。」

「流石に高すぎる…取り敢えず、俺らが行つて菌を拡散するのも良くない。」

「け、けどよお…」

「そうですけど…」

「でも…」

「―だったら、手紙でも書いとこつぜ。片葉ちゃんに届けてもらつて…」

「―ダメ。」

思わず、コナンははっと片葉の方を振り向いた。

「朝、あたしが学校行く時、哀ちゃんが…『皆に来て欲しい』って。」

「えっ？」

思わずコナンは驚きの声を上げるが、探偵団は大喜びだった。

「良かった…やっぱり、哀ちゃん来て欲しいんだよ！皆に！」

「ですよ…」

「よし、全員で行こうぜ！」

ただ、疑念が渦巻くのは―コナンの頭の中。

（嘘だろ…灰原が、そんな事言うか？熱出してる状態で…何か、目的でもあるのか？）

「どないしたん？」

ふと首を傾げる片葉に、コナンは聞いた。

「灰原―意外と元気か？」

「そ、そういえば…そやね。結構元気やったけど…それがどうかしたん？」

「あ、いや…なんでもねえ。わりいな…っと、授業始まるぜ…」（…嫌だな。この違和感。）

不自然な灰原の言動は、コナンの頭に引っ掛かって、残り続けた。

~~~~~

『哀ちゃん！お見舞いに来たよっ！』

外からの、大きな声…吉田さんね。

…来たのね。ようやく。

私が…全てを終わらせる時。

—もはや私がこの町に居る価値は無い。だから。迷ってはいけない  
…最悪にならないように。私という犠牲を支払えば…全ては丸く収  
まるの。

…さあ、時間ね。ようやく…終わる時間。

—全てを、終わらせる時。

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(8) (前書き)

結局、短くなりましたm ( mすいませんm ( m

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(8)

『――哀君。』

ドアがノックされ、灰原が返事をした。

「…何…かし、ら…ゴホッ、…」

『――ああ、無理せんでもええぞ…子供達じゃ。どうじゃ？大丈夫そうか？』

「…え、ええ。大丈夫よ…入れてあげて。」

『ガチャ』

「哀…ちゃん？」

心配そうに、歩美が最初に部屋に入り、続いて探偵団の面々が中に入っていく。

「ありがと…、皆。来て、くれ…て…ゴホッ、ゴホッ―」

「だ、ダメだよ！起きちゃ…」

起き上がるうとする灰原を、歩美が制止した。

「ごめ、んなさい…も、う…だから…」

「え？」

小さな声を聞き取ったコナンが、疑問形で返した。

すると、静かに灰原は微笑む。

「…もう、最後…だから。あなた、達に、会う…のは、…」  
「さ、最後!？」

思わず大きな声を光彦は上げる。

（まったく…相変わらずの気弱状態かよ。ま、風邪だしそうなるのも分かるけどよ…）

そして、元太は聞いた。

「最後って…お前、転校しちゃうのか!？」

しかし、次の答に、二人に衝撃が走る事になる。

「―え、え…そう、よ。私…この町、を…出る、の。」  
「えっ!？」

コナンと片葉、二人同時に声が重なった。

「そ、そんなあ…」

哀しそうな声を出す光彦。

「哀、ちゃん…」

「―大丈夫、よ。また、会え、るわ…それ、に…まだ、もう少し…先の、事、だか…ら。でも、今日、は…ありがと、本当に。」

「うつん…でも、本当に転校しちゃうの？」

「え、ええ…あた、しの…お姉ちゃ、んの所に行く、から…」

「そつか…それじゃあ、仕方ないね…」

歩美の間に答える灰原。肩を落としながらも納得する探偵団三人。

―だが

「ふ、…んな。」

「え？」

―閑静な住宅街が、一瞬でざわめき始める事となる。

「ふざけんじゃねえ！！灰原っ！！」

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(8) (後書き)

リメイク小説の影響で次回投稿は少し先になりそうです。よろしく  
お願いします m (——) m

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(9)

「ふざけんな！何が『転校する』だよ！？お前、何言ってるのか分かってんのか！？」

コナンはベッド上に居る灰原の首元を掴み、怒り狂った形相で灰原に顔を近づける。

「ちょ、コナン君！」

「―意味、は、そのままよ。私は転校する…ゴホッ、少し離れた町に…」

苦しそうな表情のまま、冷静に答える灰原。

「テメエ！いい加減にし―」

『パァン』

―狐につままれたような表情になったのはコナンだった。さっきまでベッドの反対側に居た筈の『彼女』が自分の頬を平手で打ちつけていたからである。

「な、何すんだ！この―『プスッ』っ、っ…あ…」

『バタン』

「こ、コナン君！？」

「大丈夫、歩美ちゃん……コナン君、寝てるだけやから。」  
「え……？」

三人は啞然とした表情で、その成り行きを眺めていた。

そして、一人立ち尽くした少女は、普段見せない寂しげな瞳で、麻酔銃で眠らせたコナンを見つめていた。

（……ダメやな、やつぱ……）

握り締めた右手を解くと、片葉はすつと笑顔を作り、それを探偵団の三人に向ける。

「ーなあ、皆……哀ちゃん、転校しちゃうやろ？やから、皆で……手紙書こう、って思っんやけど……」

「そ、そうですね……」

「そうだな……」

「……うん。でもコナン君は……」

「ーわしが二階まで連れてくから、心配せんでええぞ。」

タイミングを随分と計りかねていた博士が、部屋の中に入ってくる。

「博士。後でコナン君に、手紙書くように言っというってもらってええ？」

「あ、ああ。分かった。」

博士は、静かにと寝息をたてるコナンを背中に背負い上げ部屋から運び出す。

「あ、うち後で行くから。先にそこで考えててええよ。」

少し沈黙が流れると、片葉は3人を外へ出るように促した。

「じゃあ、早く来てね。」

「う、うん…分かった。」

『ガチャン』

扉が閉まった途端、灰原は横になって倒れこみ、眠りについてしまった。  
う。

「ちやう…」

悲痛な声で一言だけ漏らし、部屋の中で座り込んだ。

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(10)

「…はあ。」

3人が阿笠邸を出て、ようやく一息つく片葉。

(…あたしやって、新一君と…同じ気持ちやったのに…)

灰原の首根っこを掴み上げ、罵倒していたコナン。

—自分だって、そうしたかったくらいだ。それ程に、灰原の発言の弱気さが見て取れた。

けれど、行動に移すような勇気なんてなかった。灰原哀という少女が見ている世界が、一体如何なる物なのかなんて、分からなかったから。

(…なんで？哀ちゃん…言ったやん。あたし…哀ちゃんに、言ったやん。『—死んでも良いなんて、思ったらアカンって。絶対。』って……あん時笑顔やったやん、哀ちゃん…)

頭の中で『哀ちゃん』を繰り返しながら、片葉はソファに寝転がる。

(—昨日辺り、哀ちゃん…嬉しそうやった。やっぱり、昨日の夕ご飯の時…)

ここ数日、灰原は確かに元気だった。

―ただ、気掛かりだったのは昨日の夕食の事だった。

浮かない表情とは違う、何か考え込むような表情を浮かべ、夕食に手が付かない灰原を見て、随分と片葉は心配したのであった。

―片葉が問いかけると、笑顔を作って「なんでもないの」と答えて、すると普通の表情を保つようになった。

そして、その翌日である。中々起きてこない灰原を、片葉がノックして起こしにいったその時、ふらふらと歩いてドアを開き、ぶっ倒れた灰原を見たのは。

（哀ちゃんに…何か、あったんや。帰るのが遅かった…あの日に。）

（…けれ、ど…）  
思考が止まる。

（そこまで、分かって…）

『自分に何が出来るのだろう。』

―そう理解したから何が出来る？

―彼女の目の前に立ちふさがる問題をたとえ、調べて知る事が出来たとしても、それから何が出来る？

―彼女を元に戻し、救い出す為に、一体自分は何が出来る？

『どうすれば灰原哀という絶望する少女に幸せを、少しでも未来を切り開こうとする道を作り出す事が出来る？』

『無力』

その二文字を、片葉は思い浮かべる。

（結局…何も出来ない…やん。あたしじゃ……）

両手で、片葉は瞳を覆い尽くした。

「どうしようも…ないっ……………！！…何も、哀ちゃんに……………してやれる、事が……………ないっ……………！！」

## 5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(11)

怒りを通り越した何かが、コナンの体中を伝っていく。

(守るんだ…俺は。守るんだって…全部……)

―自ら死を選ぼうとする少女。

(探偵が…探偵が、女の子一人守れねえで……どうすんだよっ……！)  
探偵の究極の目標は『事件を未然に防ぐ』事。

―死者、負傷者を出さない事。

(…くそっ、くそっ……)

高校生名探偵として、工藤新一は至る所で取り上げられる。行方不明となって1年が経とうとする今も、まだちらほらと名前は目にされる。

―なのに小学生一人すら守りきれないのか？―

「くそがあああつ!！」

~~~~~

「おお、新一。」

コナンはばたと起き上がり、ベッドを飛び降りた。

(…くそがつ!)

「お、おい、新一——」

付き添っていた博士がとめる余裕すらなく、コナンは部屋を飛び出す。

階段を駆け下りて、コナンはすぐに灰原の部屋へと飛び込む。

「灰原あつ!!」

「…何？」

「……お前。」

いたって冷静に、灰原は返事を返す。

「…どういう事だよ。説明…しろよ。」

「—だから、言ってるじゃな、ゴホッ、い。私は転—」

「ふざけんじゃねえ。お前が…お姉ちゃんの所に行く?…分かってんのかよ。何言ってるのか…」

コナンの鋭い視線にも、まるで怖じる事無く、灰原は頷いた。

「ええ。」

「……そうか。」

コナンは軽く笑い、ゆつくりと部屋を出る。

「悪い、邪魔したな。」

「……」

「—でいいわけねえだろがああっ！」

コナンは一步進んだ所で反転し、右腕で灰原に殴りかかる！

「っ！」

右拳が灰原の頬を捕らえる―その瞬間！

『パシン』

「もう、もうやめてっ!!」

――目の前に姿を現したのは片葉だった。

「……っ、どけよ。」

コナンは右手を振り払い、片葉を退ける。

――しかし、すぐに片葉はコナンの前で大きく手を広げて立ち塞がる。

「――イヤ。」

「……わかりやしねえだろ。お前に――」

「分かる!」

片葉は大粒の涙を流しながらも、コナンの方向を向いて叫んだ。

「うちにだって、分かる! 新一君は哀ちゃんの事を大切にしてる……」

死なせんように、しようとしてる! けれど……やりすぎやって。それ

じゃ哀ちゃん……傷付く……だけやん。」

「……」

そして、片葉は呆然とした状態の灰原の右手を握って、柔らかく包み込む。

「――哀ちゃんと一緒に居れた時間なんて、短いけど……けど、分かる。哀ちゃんが……辛かった事ぐらい。お姉ちゃんの事は今日始めて聞いたけど……哀ちゃんの大切な人やった事ぐらい、うちにやって分かる。けれど……」

涙が、その握られた拳に零れる。

「…喜ぶ…んやろか。お姉ちゃん…哀ちゃんに、そんな形で…会えて…っ…」
「！！」

三人は暫く、動かなかった。

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(12)

「あたし…誤解してた。」

「…え…?」

まだ、片葉の瞳からは粒が伝い、静かに落ち続けている。

「『抱え込んだじゃいけない』っていうけれど、抱え込まなきゃいけない事やって…あるんやって。」

「……」

「―全部、哀ちゃんに素直に話させるのなんて、間違ってる。哀ちゃんには哀ちゃんが思っ、考えて、自分だけの胸の中に仕舞っておきたい事やって…あるんやって。」

それでも、片葉は小さく笑顔を作った。

「―だから、もう…ええんよ。けれど、皆…あたしやって、コナ君やって、探偵団の皆、博士、蘭ちゃん…皆哀ちゃんには居なくなつて欲しく…ない。それだけ、分かって?―あたしからの、お願い。」

「っ……」

片葉は、軽くコナンに目配せすると、コナンも小さく頷いた。

「—ごめん。灰原。」

「……馬鹿。」

「「え？」」

灰原は、震えるような声で続ける。

「……どうして、どうして……？」

「……どうして……どうして、貴方達も……皆も……こんなに、優しいの……
っ……どうして、どうして!……？」

戸惑いが頭の中を覆い込んでるのか、灰原は頭を抱え、二人の方向から視線を逸らし、顔を枕へと押し付ける。

「どうしてよっ！…どうして…貴方達は私なんかの事をそこまで気遣うのよっ！…もう…もう……良いじゃない！私なんてっ！…私…なん、て…てっ……」

—その優しさが凄く嬉しい。
—けれど、その優しさが物凄く辛い。

…葛藤が、灰原を揺らす。

「……優しさ、ってよりはさ。」

コナンが、口をようやく開く。

「当然…なんだよな。ただ、違うんだ。灰原は…灰原は、感じる事が違う。それだけ…なんだと思うんだよ。灰原。」
「……」

ぐすり泣きを響かせながら、灰原は呟いた。

「皆、まとめて…消えちゃえば…良いのにつ…」

―嬉しさへの反発か。それとも、これから起こる事…もしこの優しさに包まれるような時間が、二度とやってこなくなってしまう事の恐怖か。

けれど、一つだけは確かだったから、二人はゆっくりと部屋を出た。

『灰原哀という少女が、葛藤の中で生きようとしている事』

「ありがとう……」

出て行く二人は、この眩きを聞いて、もう一度確信する。

『灰原哀という少女が、葛藤の中で生きようとしている事』

5章 皆まとめて消えてしまえば良いのに(12)(後書き)

章完結。さて次章は久々に片葉とコナンの絡みです。感想、評価、
よろしく願いしますですm(____)m

間章 例えば、そんな日常（2）

『ごめん…私、熱で変な事言ってたみたい。嘘なの…ごめんなさい。』

灰原哀が、転校するという噂話は、僅か1日程度の騒動で収まる事となった。

探偵団の3人からクラス中に伝わったこの噂だったが、「そんな話は聞いていない」とバツサリ小林先生が否定した為、3人はもう一度真偽を確かめに灰原哀の元へ向かえば、本人の口からそう伝えられた為、3人も納得したのである。

「…良かったな。」

「うん…」

コナンの言葉に、小さく片葉は頷く。

「灰原、元気か？」

「熱は…少しずつ下がってるみたい。」

「そうか…」

ゆっくりと、コナンは前の席に座る片葉の肩に手を置き、机にぐったりと倒れこむ。

「どないしたん？」

「―疲れた。」

「…推理小説の読み過―」

「違えって…てか何冊読んでも疲れねえよそれじゃ……」

「分かってるって―ありがと。本当、新一君のお陰。」
「……」

片葉は振り向かず言う。

「……コナン君、本当哀ちゃんの事…ずっと気にしてたんやから…
…哀ちゃん、嬉しそうやった。」
「…そうかな？俺が行ったぐらいで？」
「―絶対そうやって。」

片葉も机に突っ伏して、倒れこんだ。

（…あたしの不安を…不安で潰されそうなたし、余りにも無力すぎるあたしを無意識の内に支えててくれてるんやし…ね。）

3時間目の始まりのチャイムが鳴る。教室には他には誰も残ってはいない。恐らく、移動教室なのだろう。

―二人はそのまま気持ち良さそうに眠りに就いた。

（…………そろそろ…やろか…）

一人の少女が、忘れ物を急いで取り出して、部屋を出て行く。

春の風が静かに教室の中に流れ、江戸川コナンの1年が終わろうとしていた。

間章 例えば、そんな日常（2）（後書き）

次章、いよいよ服部平次登場。平次と片葉…思わぬ出会い。

6章 二度目の邂逅(1)(前書き)

久々の試運転。

6章 二度目の邂逅（1）

―大切な出会いはいつも突然やってくる。

今回も、平次からしてみればただの憂さ晴らしの東京行きだった。

―アポなしなのはいつも通りで。工藤新一を驚かすのはいつものことである。

しかし、彼は見てしまう。

―その少女の、不自然な和葉との一致具合を、この探偵が見逃す筈が無い。

全ての始まりは、この日だったのかもしれない。

~~~~~

―2階。毛利探偵事務所。

朝から小五郎は仕事で出ていて、コナンはゆっくりとお留守番となっていた。

「まったく…何しに来た。」

「まあ、まあ。そう言う事ないやろ…工藤もストレス溜まってる思うてな…つっても一番溜まってるのは俺なんやけど。ま、どっか行こか。ほら、『コナン君』。」

蘭の声真似をしてけらけらと笑う平次を、「似てねえ」とぼそりと呟いてコナンはジト目で見た。

「まあまあ…ちょっと、話したい事もあるんやし…そや、ひとまず公園にでも…」

「そうだな…じゃあ(すうつ…)蘭ねーちゃん！ちょっと平次お兄ちゃんと出掛けてくるね!!」

「…あれ？」

「どないしたんやろ…『服部君来てるの！？』ってびっくりして…」

「―お前、いつから声真似にはまったんだよ…蘭姉ちゃん！」

「ははっ…」

だが、もう一度呼んでも3階に居る筈の蘭は下りて来ない。

「じゃあねえや…メモ書いとくか。」

メモ用紙を一枚契りとして、コナンはそこにすらすらと出掛け先と時間を書き込んで、テーブルの上に置いた。

「そんじゃ、行くとすつか。」

「そやな。」

鍵を閉めて、二人は探偵事務所を後にした。

(……さて、と。)

子猫のように、棚の上から少女は飛び降りる。

(睡眠薬はあと2時間も持たないし……さっさとせんな。)

~~~~~

『なんや、ジン。見逃せ言っんか?』

『……あの餓鬼が何を隠しているのか知った事じゃねえ。どうせ何を企んでようが関係ないさ……お前は好きにしろ。殺したければ殺ればいい。』

『んな事言われたって……うちが殺せるわけないやろ。』

~~~~~

(……大丈夫。ちゃんと守るから、な。)

## 6章 二度目の邂逅(2)

音沙汰が無くなってから、何ヶ月が経つだろうか。

段々と死亡説が出回り始め、徐々に搜索も打ち止めの雰囲気が始まり始めた。

（くそっ…警察め。上に圧迫されてやる…なんやホンマ。どうして…）

父親にも、新一にまでも牽制されながら、平次は平次なりにこの事件の全貌を把握しようとしていた。

―『諦めとけ』とは言われたものの、どうせ最初から情報が入ってこないのだからどうしようもない。

「―で、調べてたわけか。」

バレバレだろうとは分かっていた平次は、大きく頷いた。

「あん時は悪かったよ…ちょっと言い過ぎた。ま、それ自体をもう非難するつもりはねえけど、間違っても『触る』なよ。この事件の裏側に何が潜むか…わからねえんだからな。

で、何か情報は手に入ったか？」

「いいや、全く…幾らなんでも可笑しいくらいに、情報が入ってこなくてなあ…」

大きく欠伸をして、公園のベンチへと腰掛けた。

―続けて、コナンも腰掛ける。

「服部―見つかると思うか？」

「……さあな。」

「……まあ今現状、組織と接触したらお前は確実に足手まといだよ。」

その言葉に、ポケッとしていた平次も大きく反応する。

「なっ……あ。」

食って掛かろうとしたが、その前に気付いた。

「ベルモットみたいな能力者……あいつらからすれば変装なんて序の口だからな……和葉ちゃんの声一発で、お前はフリーズ決定だよ。いや、まあ皆そうだけだな。だから知り合いに被害者を出したくなかった……前はちよつと感情的になっちまったが、今言えるのはお前と接触して正体バレちまった俺、そして何も予兆を掴めず、和葉ちゃんをまんまと捕まえさせてしまったお前。責任は5分だな。」

「へー、へー……」

コナンはあえて、平然と平次には嘘をつく。

―片葉という存在を知られたくないから。

「……すまん。ちよつと熱くなった。」

「――まあ、それがお前だからな……」

コナンはフツと笑って、大きく伸びをした。

静かな午後の公園の中を、弱い風が通り抜ける。

―それがとても平次には心地良く感じられた。

（…元気やと、ええけど。）

けれど、空を見上げると少しだけ黒く染まり始めていた。

## 6章 二度目の邂逅(3)

(しっかし…)

あれから1時間は経っただろうか。

―隣の少年はスースーと寝息を立て始めた。

だが、この青年の興味はそんな事には全く関係ない。コナンがたえベンチから落ちてしまおうと、笑ってやり過ぐすに違いない。

(…なんか気になるなあ。)

平次の目線の先に見えるのは、公園内をうろつろしている女性だった。

―人目を引くような肌蹴た服が、綺麗な容姿をますます強調させている。

別にこの少年が妄想を働かせていたわけではないが。

(何か探してるんやろか？いやそれにしては…)

ふとそんな事を考えていると、その女性がこちら側に近付いてくる。

「あの…すみません。」

「ん？どないした？」

「えつと……あつ！」

すると、はつとしたようにコナンの方向を指差した。

「んっ……え？」

と同時に、その声でコナンが目覚める。

「ぼつや、もしかして……あのキッドキラーの？」

「え、……え？」

「よかったあ……ちよっとお願いがあるんだけど……探し物してて来てくれる？」

思わぬ事態に、慌てる平次。

「ちよっ——」

「お願いっ——」

そして、なりふり構わずその女性はコナンの手を掴んで引っ張っていく。

「……おい……」

完全に無視され、平次はがつくりと肩を落とした。

（……なんや。やっぱ探し物が——うう……眠い。）

自分もついでに探しに行こうか、などとも思ったが、平次はあの女性がコナンだけ引っ張って行ったのを思い出すと、なんだか腹が立ち、眠気に負けてそのまま眠ってしまった。

風が、少しだけ強くなったのを感じながら。

~~~~~

「ふふっ…ありがと。お陰で速く見つけれたわ。」

ポケットにコナンが発見した髪留めを仕舞うと、コナンの頭を優しく撫で、軽く抱き締めた。

「ど、どういたしまして。」

「本当に、ありがとね。」

もう一度女性は優しく微笑むと、公園を後にした。

(……………?)

少年は、何かの違和感を探そうとしていた。

―いつもとは違う『何か』。

―本来感じない筈の『何か』。

いや―彼女の存在から感じた『何か』。

(けど、材料が少なすぎる…これだけじゃ、無理かな)
「おゝい。終わったか？」

小さく息を吐き出すと、コナンはゆっくり振り向いた。

すると、ニンマリと平次は笑う。

「―あの姉さんに看取れてたんやろ。そこで直立してたの、見てたで。」

「なっ……」

「さ、昼飯や昼飯。詳しく話してもらっで」

「や、やめろっ！服部！」

平次は、コナンを引き摺って歩いて行った。

—これは、『一度目の邂逅』。

6章 二度目の邂逅（4）

私に特にこれと言えるような特技は無い。

「中々美味しいじゃないーウオツカ。」

「まあ、一応たまに私服通いする場―」

「黙れウオツカ。作戦中だ。」

「あらあら…叱らなくなつて良いじゃない。それにあんまりぎこちないと…このタイミングでバレるわよ。」

「フン……」

武術その他様々な方面に長けるあの化け物は勿論、それどころか医学知識じゃ愛しいあの子にすら敵わない。

―少し拳銃の扱いと先を読む策略に手慣れてるだけ。

でも、私は魔法使い。

物心ついた頃から魔法に妄執し続けた私…私だけに与えられた力。

そう、あの子に魔法を掛けてあげる為に過ごした私だけに与えられた力。

「行くぞ……シェリー。」

「はいはい。」

この力で、今私は彼の隣まで辿り着いた…。

今にでも殺りたいけど…まだ頃合いではないわ。そう、愛しいあの

子を私だけの人形にする為には……彼らに動いて貰わないといけな
いから……

「―それじゃ、手筈通りに。」

「成功するんだろうな？」

「まさか……失敗すると思う？」

「……今回は通常任務が監査のお前に一任してるからな。そもそも
ここに居るんだろうな？」

―その疑問、当然よね。私の脅迫で決めた交換条件だもの……

「上にシエリーの件を報告しない代わりに私が殺して引き取る。」

まあ、ジン。あなたは不要品……どうでも良いのよね。

ああ……愛しい愛しい私の人形。もうあなたには樂園しか魅せない
わ……

もうあんな幸せすぎる夢は気持ち良すぎて見たくないんでしょ？じ
ゃあ幸せだけを魅せてあげる。

心配しないで。あなたは工藤新一という大切な存在のお陰で私の人
形になる。

そして、あなたが一番幸せになれるあの夢だけは……私が叶えてあ
げる。

待っててね。「志保」……………

~~~~~

「刺青？んなもんがあ姉さんの首元に入ってたんか？」  
一口コーヒを飲んでから小さくコナンは頷いた。

「ああ、ちよつと見えづらい所だけだな。けれど……」  
そこでコナンは言葉に詰まる。

平次がパスタを一気に食べながら聞いた。

「なんや。どうした？」

「いや…妙なんだ。」

コナンはゆっくり顎の下に考えるポーズを作る。

「……挑発するみたいに、その刺青を見せてきてさ。なんか不気味  
だった…」

「へえ…成る程。それであそこで立ち止まってたんやな。」  
「へ？」

ニツと服部が笑みを浮かべる。

「―どうせ工藤のことやし、抱っこされたんやろ?」

「なっ!んなわけ―」

「あゝやらしーやらしー。」

ニヤニヤと笑う平次が腹立たしくなって、コナンはぶっきらぼうに吐き捨てた。

「よく付き合ってられるよな。和葉ちゃんも……」

「ま、あいつはもう慣れたもんやろ……え。」

突然、平次が硬直した。

―視線だけが、ゆっくりと動かされる。

「どうした?服部。」

「いや…あの姉さん。」

またか?と聞き返したくなったコナンだが、平次の指した方向を見る。

「あれって…」

凝視する平次。

―目が充血していくコナン。

「なあ。工ど…」

バァァン

「くそっ…灰原っ!!」

店を出ていくのは、確かに三人の姿。

ジン、ウォツカ…そして、何故かシェリィ。

―そう、宮野志保。

## 6章 二度目の邂逅(5)

「くそっ……！」

コナンは慌てて席を立ち、走って店内を飛び出て3人を追い掛ける。

「お、おい！待てや工藤！」

平次も続いて慌てて飛び出ようとするが、店を出ようとした所で勘定を忘れていたことに気づいた。

（あーっ、もう！）「釣りは要らんから！すまん！」

慌ててレジにポンと1000円札を一枚置いて、平次も慌ててドアを飛び出る。

（何処や！？あいつら……いや、工藤！）

平次が、東京に来る前に調べておいた路地裏の外食店。

数秒遅れただけで、その付近にはもう誰の人影も見えなくなっている。

（くそっ、どっち行っただ……？）

よく晴れて乾いたコンクリートに足跡なんかあるはずもなく、平次は二択を迫られる。

（もうええ！直感や直感！）

これ以上時間を掛けるわけにもいかず、平次は急いで右の方向へと走り出した。

「何処や！？あいつら……あ。」

路地を飛び出ると、大きな交差点へと出た……は良いが。

「……工藤。」

「くそっ……」

——コナンも見失っていた。

「どうした？あいつら……」

「いや……この路地を飛び出た所で、3人ともずっと姿を消しちまった……おい、まさか——」

はっとして、コナンは急いで走り出した。

「おい、工藤！（まさか……あいつ！）待てや！くど——」

「お客さん？」

「へ……」

―さっきの喫茶店の店員に、走り出そうとした平次の腕が掴まれる。  
「勘定…50円足りなかったんですが。」

「は…」

「いや、だから。1050円なので、1000円じゃ足りませんか  
ら。残りをお支払い下さい、って言ってるんですよ。」

「な、なんやそれ!!??」

財布を取り出して、急いでチャックを開き50円玉を店員の手の上  
に乗せると、今度こそ平次は駆け出した。

(くそぉっ…)

―だが、もう遅い。コナンは一人姿を消していた。

~~~~~

（くそっ、くそっ、くそっ！）
—阿笠邸前。

灰原の無事を祈りながら、全力疾走を続けたコナン。
—呼吸の大きな乱れを、5秒程立ち止まって整える。

（灰原っ…！）
その背丈ではギリギリの高さのインターホンを押すと、すぐに中から反応があった。

『はい…』
「か、片葉ちゃんか!？」
『え、うん…そうやけど。どないしたん？』
「—ヤバい事になってる。それより、灰原は？」
『え…哀ちゃんやったら、今も寝てる…と思うけど。』

まず、裏切ったという可能性の消滅に、コナンはほっと安堵する。

『それで…なんや、それだけ？』
「いや—色々あってな。それより、鍵開けてくれねえか？」
『あ、うん。分かった。』

片葉が扉を開く。

「あつ、コナン君だ!!」

「歩美ちゃん!？」

にこつと笑顔を見せると、歩美は片葉に寄り添った。

「えへへ…この前、哀ちゃんに皆で手紙書いたでしょ？ちょっと渡す為の仕上げをしてるの。」

「それで、歩美ちゃんに手伝ってもらってるんよ。」

「へー…」

テーブルの上には、1・Bのクラス全員が書いた1枚1枚の手紙と全員に小林先生から指導された中で、折り方を習得した数名の必死の奮闘で出来上がった見事な千羽鶴が置かれている。

「あつ、歩美ちゃん。ちょっと待っててな。」

「うん、分かった。」

片葉はそう言つて、歩美を部屋に残してコナンを引っ張って行く。

（ナイス。片葉ちゃん…で。）

（うん…全部話して。）

（わーってる。）

もう一度呼吸を整えて、コナンは「見るはずがないもの」を見てしまった事を、片葉に伝えた。

6章 二度目の邂逅(6)

「…それじゃあ。」

「ああ、信じらんないかもしれないけど―その女性が、志保の在るべき姿…宮野志保の変装って事…になるのかな。まだ断言は出来ないけどな。」

現実離れたその話に、大きく片葉は頭を抱える。

「うちにはようわからん…けど。そもそもなんでその女の人はその事してたん？」

「ああ…ぶっちゃけ俺もだよ。」（そうだ…一体、何の為に？）

全くコナンにも思い当たる節はなかった。

（組織内で何か進展があったのか…いや、違う。やはり灰原に関連して何かあるんだろ…）「とにかく、灰原から暫くは目を離さない方が良いな。」

「そやね…あつ、そろそろ戻らんと。」

早足で説明してたとはいえ、案外時間が経っていて、慌てて片葉とコナンは歩美の元に戻る。

「遅いよー二人とも。」

「ごめん、ごめん。」

「すまんな…あつ。」

歩美は手紙の入った袋に、綺麗に飾りつけまで済ませていた。

「どうかな？あんまり自信ないけど…」

「ううん！全然！歩美ちゃん上手やな…」

「えへへっ…ありがと、片葉ちゃん—それじゃ、持ってこ？」

三人は大きく頷いて、歩美が手紙の袋を持ち、片葉が千羽鶴を持って灰原の寝ている部屋へと入ろうとした。

だが、次の瞬間だった。

—探偵としてはあまりにも迂闊なミスが、取り返しのつかない事態を巻き起こしてしまう。

奴を完全に忘れているという、痛恨のミス。

『ガチャ』

「おーい…工藤。何処や？おお、居た居た…ん。」

（ばっかやるっ…！！何してんだアイツ！？）

（へ、平次！？）

―平次の視界に、確かに3人の姿はインプットされた。

一人目。江戸川コナン。正体が工藤新一だということを知っている人は非常に少ない。

二人目。吉田歩美。帝丹小学校の1年生。コナンのクラスメイトだという事は既に知っている。

三人目…

「…工藤。どついう事や。」

（あわわ…やめる服部！歩美ちゃんだって居るんだぞ…！！）

「―どうして。」

もう冷静さを失った関西弁の高校生探偵は止めようがなかった。

「どうして和葉がそこにいるんや!!!! 答えるこのドアホ探偵が!!!!!!」

~~~~~

轟音に威圧されながらも、まずはコナンは平次を押さえ込む。  
「何言ってるの？平次お兄ちゃん。僕はコナンだし…それに、和葉お姉ちゃんがここに居るわけないじゃない。」

「何言ってるんやアホが。そこにおるやろが！」

コナンが平次の正気を取り戻させようとしても何の効果もなく、びしつと平次は片葉の方向を指差した。

「全部わかってるんや。工藤同様…その女の子も幼児化したんやとな。何か反論あるんか？なあ！？」

（くっそ…すっげえ性質悪い。）

困惑する歩美。そしてコナンの影に隠れる片葉。

（どうするべきか…まあいいや。）「片葉ちゃん。ちょっと」「あら、江戸川君じゃない。」

―それは、最後の救いの手だった。

「どづしたの？こんな所で…」

## 6章 二度目の邂逅(7)

「江戸川君に…吉田さん—で。」

ぶれる事無い視線で、灰原は平次を見つめた。

「—どうしてあなたがここに居るのかしら？特に呼んでないんだけど。」

「そらそうや…けどな—小っこい姉ちゃん。どうゆう事が説明せえ。どうして和葉が幼児化してる!？」

「…は？」

「『は?』やないやろがあ!—そこに居るこの—」

「—あなたこそ、何熱くなってるの?彼女は『鳥山片葉』…うちが引き取った、養子よ。真正正銘の別人だわ…まさか、あなた姿が少し似てるからって彼女に重ねたの?」

「なっ…」

だが、灰原は言葉を次ぎ続ける。

—周囲も止めようにも止める瞬間がない。

「—鳥山さん、吉田さんを家まで送り届けてくれない?もう外暗いし…」

「おい、待—」

「哀れな高校生探偵ね。まさか小学生に発情でもしたの?」

「くっ…」

片葉は、小さく頷くと、歩美を連れて辛そうに部屋を出た。

「…相変わらず諦めが悪いのね。」

「姉ちゃんもまた工藤と同じ事言うんか。」

「―諦めなさいなんて私は言わないわよ。でも、諦めなかったらあなたは死ぬけどね。」

「……」

「もうあなたの大切な彼女は十中八九この世には居ないわ……頑張るだけ無駄って事よ。あなたが無駄な努力をしなければ、工藤君も哀しまずに済むわ……私、工藤君が哀しんでるの見るの嫌だから。」

小さくウィンクをコナンに向けると、コナンは慌てて顔を背ける。

「…何の解決にもなってへんな。」

「そうね。」

「…俺が聞いたんのは『あの女の子が遠山和葉』かつちゅうこつちや。そうやない事を、姉ちゃんは証明出来るんか？…無理やるな。どう見ても本人―」

（えっ…）「…いいえ、証明できるわ。」

「えっ!？」と大声を上げて灰原の方向を見るコナン。  
だが、灰原の指された方向を向いて、啞然とした。

「…流石に、私も啞然としたけど。」

「な…」

遅れて、平次もその方向を見る。

「……和、葉……？」

「へ、平次……久しぶり、やなあ。」

玄関のドアを開いて中に入り、にこつと小さく笑みを浮かべると、和葉は苦しそうにその場に座り込んだ。

―足元に数箇所銃痕が残っている。

「大丈夫か！？和葉！？」

「……ううん、大丈夫……それ、より……いかな……」

「アホ！！お前……無茶しておって！」

「ええ、んよ……今は、逃げ続け……へんと……皆に、よろしく……な……？」

そして、立ち上がると素早く走って消えて行く。

「おい！和葉あ！」

だが、門を出た所で、彼女は姿を消してしまっていた。

「和、葉……」

その光景を、黙って二人は見ていた。

「……すまん、もう帰るわ。」

大きく息を吐き出すと、「じゃあな」とだけ残して、平次は歩き去った。

そして、戻ってきた少女と……平次はすれ違う。

（……平次。）

（……こいつ。）

一度だけ片葉は平次の方を見つめたが、すぐに逸らしてしまう。  
——それに気付いて平次も、小さく拳を握り締めるだけだった。

—それは、二度目の邂逅。

## 6章 二度目の邂逅（8）

「…ねえ。」

「…そうだな。」

和葉が去ったその足元に、置かれた一枚のメモ紙。

『例の場所に。8時に。』

「……行くの？」

「ああ。一人でな…着いてくんなよ。今回仕掛けるのはあいつじゃないだろうけど…」

「―嫌よ。あなたが狙われるかもしれないで、しよっ…？」

「やめとけよ。お前が今無茶したって何にもならねえんだから…そうだろう？」

コナンは咳こむ灰原をソファに座らせる。

「…そうね。そうするわ…で、何か用事があったの？」

「ああ…っと、その前に。」

小さく笑って、コナンはそれを差し出した。

「え…」

「―千羽鶴と手紙。クラス皆で書いたんだから、後で読めよ？」

「…はいはい。あなたの以外はね…」

（おいっ…）「…で、良いか？話して…」  
「ええ、どうぞ。」

小さく息を吐いて、コナンは覚悟を決める。

「…今日、お前に会った。」

「え？」

「―お前のもとの姿、宮野志保を見た。」

「…！」

「…どういう事かはわかんねえけど、ちょっとヤバー」

「馬鹿っ…！」

途端に灰原は、コナンの肩に手をあて、そしてゆする。

「あなた…まさか…」

「え…」

「…っ…もっ…ゴホッ…」

灰原はソファに横になると、コナンを遠ざけるように手を振る。

―呆気にとられていたコナンも、ゆっくりと離れた。

（ひとまず、一回家に戻ってから夕飯食べて…それから『あいっ』  
に会って、博士の家に泊まるか…）

ドアを開くと、俯いた片葉が一人そこに立ち尽くしていた。

「あ、和葉ちゃん。」

「…新一君。」

「―え？」

「…ごめん。服部の事、変に言っちゃって。」

「ううん、気にしてないよ…しょうがないやん。こうなっちゃった  
ら…」

それでも、片葉はきゅっと口元を閉め、瞳を潤ませる。

「…けど、けど…一言でも…一言でも、ええから…なんか、言  
えたら…平次に、何か言って…平次を楽に出来たらっ…え  
えのに…」

（…和葉、ちゃん。）

「…けど、もう誰も…」

「え…」

一度袖で拭おうとした涙を、無理矢理片葉は抑え込んで、片葉はい  
つもとはかけ離れた痛々しい笑顔をコナンに見せた。

「―もう、誰も…傷つけたく、ないんよ。やから、我慢する。あた  
しの正体を知ったら平次傷付くやんか…それに、死んで欲しくない  
…正体知っちゃって、もう…この世界から消されたらっ…」  
「…あ…」

しかし、我慢出来ずにそれでも涙は零れてしまう。

「―大丈夫…ずっと迷惑掛けてまうけど、あたし…絶対、誰にも

言わない…から、…やから、早く…捕まえたって。お願いやから…」

そして、涙声のまま言った。

「お願い、新一君つ…その、組織つちゅう…、つらを…」  
—声にならない言葉を残して、片葉はコナンに抱きついた。

「…ああ。」

小さく頷いて、そのまま片葉を受け入れる。

「…ごめんな。いきなり、泣いたりして…あたしなんてそんな苦  
労してないのに…」

「…良いよ。頼ってくれただけで、安心したしね。」

片葉は僅かに残った涙を袖で拭くと、小さくコナンに手を振って、  
阿笠邸へと戻っていく。

(…………時間がねえ…もう、そろそろか…)

コナンは、すぐに自分の家へと向かう。

―しかし、それは毛利探偵事務所ではなく…真の姿の自分の家。

―たった今は、沖矢昴という男性が住む…高校生探偵工藤新一の家。

~~~~~

『ピンポン』

ベルを鳴らしても、反応がないのは予想できた。

「…っと、やっぱり開いてるか。」

ドアを開き、「ごめんくださーい！」と一応声を上げたが、全く返答はない。

(…さて、と。)

自分の部屋の机からメモ帳を一枚引き契って、コナンはそこに文字を羅列していく。

―そして、それを玄関付近に置いた。

(……そろそろ動いて貰わないと…困りますよ？殻を被りっぱなしじゃしょうがない…切り札は動ける時に動かないと…そうですよね？)

6章 二度目の邂逅（9）

『ごめんね…突然眠くなっちゃって、ずっと寝てたの…』

『そっか。無理しないでね、蘭姉ちゃん。』

『うん…あつ、夕飯は外に食べに行こっか。まだ5時過ぎたばかりだし、今行けばまだ空いてるよね。』

『ねえ、今日博士の家に泊まってもいい？』

『えっ…良いけど。』

『ありがとう、蘭姉ちゃん。』

その場所は。

「結構上手かったじゃねえか。ベルモット…」

—あいつの仮面の下を見た場所。

「ふふっ…良かった。あんま自信なかったんよ？これ…」

「本当に助かったけど……その声はやめろ。本物に見えてきて頭が痛え。」

和葉の姿をしたベルモットは、クスクスと音を立てて笑う。

—限り無く本物に近く見えるから恐ろしい。

「けど、案外お似合いちゃう？」

「誰がだよ。」

「—あんたと私…まあ、和葉ちゃん。結構息合うと思うんやけどな。」

「へーへー…それよりさつさと用件話せよ。生憎俺もそんな時間ねえんだ…それに、あんただって長話してる余裕ないだろ？」
「はいはい…分かったわ。」

素早く変装を解くと、いつものベルモットへと姿を戻す。

「さてと…シルバーブレッド。ちよつと今回はかりはややこしい話になってるみたいね。」

「今回ばかりは…ってか前からだよそれは。」

「まあそうだけど…どうやら、ちよつと和葉ちゃんの家系繋がりで色々知っちゃった事があってね。」

「家系…」

小さく頷いたベルモットは、「聞く？」と問う。
「当たり前だ。」

「…まず、遠山和葉。彼女の両親だけど…父親はいたって問題なし。大阪府警の刑事部長…」

「ー待て。」

ちよつと待てよ…

「ーまずそれを知ってるのは良いけどよ、和葉ちゃんのお父さんは今何処で、どうされてる？」

「…鋭いわね。流石…といいたいけど、残念ながらそれはまだ私も知らないわ。一応分かる情報はまだ行方不明で…組織に捕まった筈なんだけど、正確な事は何も分からない。」

「…すると、もしかするとベルモットに知られたくない事って可能性…それこそ、知られたら困る事として隠蔽されてる可能性…」

「あら…どういう事かしら？」

……やっぱり。

「―逃げられたのを、その管理者が隠しているか…」

「最悪、もう死んでるか…かしら？」

「…てめえ。」

「―何度も言うけど、私は何も知らないわ…で、本題に戻って良いかしら？」

くそつたれ……

「ああ。さつさと続けてくれ。」

「…問題があるのは彼女の母親の方なのよ。どうやら、今『生きてない筈の存在』らしいわ。」

「……………え？」

え？

「……………相葉有香。それが彼女に付けられた名前…のはずなのだけけど、そんな人間はどこにも存在しないのよ。彼女は結婚後、遠山綾葉と名前を変えて、こちらは戸籍に登録されているわ。」

「ちよつと待て！…どうして、有香って名前が付けられたって…まさか―」

「そう、そのまさか…彼女は数少ない組織から脱獄したにも関わらずまだ生きていられる存在。正確には、もう彼女は追い掛けるのは諦められたの……詳しい過程は私も知らないけど、その時に姓名を変えたと考えるのが一番分かり易い答ね…」

「…家庭裁判所にコネクションがある…って事か…？」

「ええ…姓名の変更には家庭裁判所の許可が必要だけど、精神的苦痛とでも上手く誤魔化して、変更したんでしょうね。そして、結婚して名字が変わった……けれど、ジンはその一連の事を知ってたらしいくて…遠山家襲撃の際には、彼女を捕まえる事も狙ってたらしい

けど……彼女。前からずっと逃げる事には長けててね…簡単に逃し
たらしいわよ。」

「……そうか。」

くっそ…かなり複雑な話に…

「…で、もう一つ。いいかしら？」

「え？」

「……ちよつとヤバいのがこの付近に来てるわ。深い刺青のある、
非常に危険な存在がね。」

「……え。」

ベルモットの真剣な表情。

—いや…まさか…？

「そして…」

なっ—

『パキン』

「バレたわね。
……っ……!!」
彼女の居場所。
」

7章 混沌の渦(1) (前書き)

この章はこれまでの話の伏線が一気に拾われます。

―よってかなり急展開になりそうですが、よろしく願います m

―― m

7章 混沌の渦（1）

「バレ、た…？ホンマなん！？」

「ええっ、多分…もう、私の正体は……」

再び体調を崩した灰原は、片葉に看病されていた。

枕元に置かれた体温計は38度手前で止まっているが、それ以上に灰原の表情は歪んでいた。

「…恐らく、工藤君に仕掛けられてたのよ。私の居場所を探るべく…彼に組織の手先が接触して…私の真の姿を見せる事で、私を氣遣わせて彼をこの家に向かわせた…もう、バレたでしょうね。」

「そんな…でも！やとしたら…」

「…違うの。彼は…もし、彼を…」

ベッドに横たわる灰原は身体を震わせ、少し縮こまる。

「…とめて、たら…あなる…」

「……？」

「私が…とめ、たら…」

強く唇を噛み締め、シーツを握り締める。

―悪夢の中で叫んだ、自分の言葉。

『待つて！』

『え…』

『お願い…行かないで！今行ったら…今行ったら…』

（言っではいけない…）

―自分が止めれば未来は壊れる。そう灰原には分かっていたから。

~~~~~

「嫌やな…慣れるの。」

片腕には血に塗れた短いナイフが握られている。

—いつかこうしなくちゃいけないとは分かっていたけれども。

今日まで自分の生活を支えてくれた義理の母親には僅かな恩義は感じて  
いる。

—彼女こそ、自分の母親をこの世から消し去った人物だったからであ  
った。

母親に自分が持たされたナイフで、母親に振り回された父親を殺し  
た。その事実が消し去る事は出来ないが、それでも振り回した母親  
はこの世から消えて無くなった。

—もう、自分を惑わせる存在は何処にも居ない。

(…うちがすべき事…そう、大切な『和葉お姉ちゃん』とその周囲  
を守る事…ふふっ、何考えてるんやろな…小学生が…)

あの時思わず零れた微笑の意味を、マリアはゆっくりと思い出す。  
それは純粋な小学生としての、異端ではあるが好奇心—恐怖心を力  
に変えた物なのかもしれない。

「あー……そういえば、うち自分の手相なんて見た事ないなあ……」

~~~~~

「っ……」

ベルモットは、コナンの服に取り付けられていた小型の追跡装置を軽く粉々に破壊した。

「……それじゃ……やべえ！灰原がー」

「ー大丈夫よ。私の部下を配属するように言われてるから……そう、

その『刺繍の女』にね。」

「っ!？」

ベルモットは座り込んでコナンに高さを合わせた。

「―彼女はこう言ったわ。『その内とどめを刺す』…それまでは私の部下を監視に置くよう、頼まれたわ―まあ、快諾したわよ。当然、こうすればシェリーも守れるわけ…」

「…すまん。ベルモット。けれど…」

「今は理由は聞かないで…シルバーブレッド……それより、もうそろそろタイムアップみたい…家までは送るわ。」

「ああ、分かった…けど―博士の家だぞ?道順わかんのか?」

「当然でしょう?」

コナンを止めてあった車に乗るように促すと、彼女は小さくウィンクを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9811t/>

傷つけたくなくて

2011年11月27日07時48分発行